傾城水滸伝　第六編ノ壱　曲亭馬琴著　歌川国安画
文政十二年 巳 丑（18年）春正月吉日新版　　江戸通油町書林鶴屋喜右衛門梓

▼：改頁　☆：未翻訳

さてもその後、松枝の竹世は姉豕代の仇敵の西門屋の後家お啓の首を引き下げて、姉の宿所へ立ち帰り、里人らにうち向かって、敵を討ちし事の趣を斯様斯様と告げ知らせ、お啓の首と金蓮助の首を洗って、髻と髻を繋ぎ合わせ、そのまま豕代の位牌に手向けつつ、
「姉御前、霊魂ましませば、我が此の手向けを受けたまえ。奸夫淫婦はかくの如く誅戮して恨みを返しぬ。願うは早く仏果を得て、天堂に昇じたまえ。弥陀仏、弥陀仏」と唱えつつ、身を投げ伏して念ずる有様。猛く見えてもなお絶えぬ嘆き、いや増す勇婦の回向に皆々涙を差し組んで等しくあっとぞ感じける。

かくて回向も果てしかば、竹世は又、里人らにうち向かって、
「私は領主の裁許（判決）を破り、かくまで人を討ち果たせしかば、いかにして安穏なるべき。定めて重き罪咎に行われるにぞあらんずらん。元より覚悟の事なれば、我が身の上はとまれかくまれ、又、各々を煩わさん。諸共に御舘へ参って、金蓮助、お温らの白状の趣をつまびらかに聞こえ上げ、証人になってたべ。ついて我が姉の家財をば残らずこれを売り代なして、此の度の訴えの入用に用うべし。この儀も頼みはべるかし」と云うに皆々一議に及ばず。やがて古手屋（古道具屋）の何がしを招き寄せ、家財道具の値踏みをさせ、目録にこれを書き立て、取引は明日と定めて、この日はまず久念、運蔵らに至るまで、その座にあり会う里人らは全て竹世に従って、縛め置いたるお温を引き立て、道を急いで遠近殿の御館へぞ参りける。その時遠近の冠者の太郎忠道は竹世と里人らの訴えの事の由を聞き届け、驚きながら家の子（家臣）のその役人たる者を従え、やがて問注所へ立ち出て、竹世、里人らを呼び近づけ、自ら由を問い尋ねるに、竹世は更なり里人らも金蓮助、お温の白状の趣を聞こえ上げ、その折に杢衛門が書き立てたる彼らの白状の一通を差し出して、皆その事の証人に候と申すにぞ、忠道これを読ませ聞いて、なお又、お温に由を問うに、お温は陳ずることを得ず、既にして申す趣が竹世、里人らの訴えの趣に違わざりければ、まずお温と竹世には首枷を掛けさせて、牢屋の内に繋がせ置き、里人らは重ねての▼下知を待てとて、帰しけり。

〇かくて忠道は一人密かに思案をするに、
「・・・・・竹世は月頃我に仕えて、世に稀なる勇婦なり。いわんや又、近き頃小笹姫を遙々と伊香保へ湯治に遣わせし、その折、姫を守りかしづき、事無く帰城いたさせたる。その功もある者をよしや始めの裁許を破って、お啓、金蓮助らを討ち果たせしとて、頭を刎ねんは不憫の事なり。かかれば我が心一つに賞罰を定め難し。所詮、鎌倉殿へ聞こえ上げ、上の御沙汰に任すに増す事あらじ」と思案を定めて、俄かに使者を鎌倉へ差し遣わし、竹世の仇討ちの事の趣、お温の白状、里人らの申す由を落ちも無く訴えて、決断を乞い申せしかば、鎌倉の執権北条義時、尼御台政子御前の御意として、事の裁許の下知を伝え、
「竹世は領主の裁許を破りし、その罪あるに似たれども、彼の金蓮助、お啓らが謀って豕代を殺したる事、既に分明なれば、すなわち竹世の死罪、一等をなだめて、出羽の国牡鹿嶋へ流し遣わすべし。又、お温は初めより、お啓、金蓮助の不義の取り持ちをして、悪を助けずと云う事無く、あまつさへお啓、金蓮助らが為にすすめて豕代を毒害せし事、その罪最も軽からず、あまねく巷を引き

渡し、速やかに頭を刎ねるべし。この余、久念、運蔵ら、並びに証人に立ちし里人らは罪無し。各々は安堵せしむべし」と厳かに下知せられけり。

さる程に忠道は鎌倉の下知を受けて、喜ぶこと大方ならず、次の日久念、運蔵ら全て関り合いの里人らを呼び寄せつつ、鎌倉殿の御下知として、竹世は出羽の牡鹿嶋へ流し遣わし、お温は巷を引き渡して頭を刎られる由を云い知らせ、

「汝らは全て罪無し。事の心を得よかし」といと厳かに云い渡せば、皆々喜び承って、等しく退きいでにけり。程もあらせず雑兵らはお温を牢屋より引き出して、形の如くに計らいつ、遂に頭を打ち落とした躯は犬の腹を肥やしぬ。悪事の報い恐るべし。

されば竹世は首枷を掛けられて、善平、実平と云う二人の雑兵に宰領せられ、出羽の国の肥原の郡、牡鹿嶋の砦へぞ流されける。この日彼の里人らは久念、運蔵諸共に道の茶店に待ち受けて等しく別れを惜しみつつ、売り代なしたる豕代の家財の代金を竹世に渡し、又、里人らが出し合うたる十両余りの金一包みを路用にとて贈りしかば、竹世は浅からぬ人々の情けを感じ、喜びを述べてその金を五六両、運蔵にぞ取らせける。彼は親を養う為に▼世渡りの暇無きを此の度の事に関わって、幾ばくの日を費やしたれば、今その報いをしたるなり。かくて又、里人らは送りの宰領の善平、実平にも酒を飲ませ、金を贈って、竹世の事を頼みにければ、二人の雑兵は喜んで、心よくぞ請け引きける。

さてあるべきにあらざれば、竹世は遂に人々に別れを告げ袂を分かって、万里の旅路に赴く程に、酒屋があれば立ち寄って、その善平、実平らに日一度は酒を飲ませにければ、両人いよいよ喜んで竹世をいたわり慰めけり。さらでもその両人は竹世が類い稀なりし勇婦なるを予ねてより良く知りたる事なれば、いささかも侮り傲らず、いとまめやかにもてなしければ竹世もこれを喜んで、彼らを深く愛しけり。

かくて数多の旅寝を重ねて、出羽の国の肥原の郡、牡鹿嶋も近くなりぬ。此の辺りには寒風新山、元山などと云う山々が高くそびえ、向かいに女川と云う大河あり。此の所をうち過ぎて、次の日の未の頃に元山のあなたなる丘に上って見渡せば、麓に一群の林あり。林の内に家あって、軒に酒幟をいだせしはまさに酒売る店なるべし。

その時竹世は向かいより来る木こりを「やや」と呼び留め、

「ここより牡鹿嶋まで、なお幾何里あるやらん。向かいに見える林の辺は何と呼びなす所ぞ」と問うに木こりは見返って、

「あそこは十字堤と云う所にて、只一軒の酒店あり。一つ屋にて隣は無し。あの林を過ぎりたまえば牡鹿嶋へは一里に足らず。急がせたまえ」と云いかけて、元山の方へ赴きけり。竹世はこれを聞きながら、

「さらば彼処の酒屋にて、一休みをして牡鹿嶋の砦へ行かん」と云いしかば、善平も実平も「しかるべし」と答えつつ、三人等しく丘を下り、林の辺に行って見るに、実に一軒の料理酒屋あり。この店の門辺に大榎あり、幹の太さは十人して抱くとも、なお余りつべし。竹世はこれをつらつら見て、「さても稀有なる大木かな」と云いつつ内へ進み入り、三人は座敷へうち上れば、主人とおぼしき一人の男、齢は二十七八にやあらん。眼つぶらに青髭が顎に満ちたるのが、忙わしく出迎えて、

「お客たちは酒をや召される。いくらばかり参らせん。肴は鰰のうま煮あり、吸物、刺身も候」

と云うを竹世は聞きながら、
「酒はいくらと限る事か。肴も数多持ていでよ」と云うに主人は心得て、小者らにしかじかと言葉せわしく云い付けて、まず茶をすすめなどする程に、主人の男は竹世らの旅包みに眼をつけて、見ぬ様にしてじろじろと▼見るのを竹世は悟れども、なおさらぬ面持ちしつつ微笑みながら主人に向かって、
「ここもとは男世帯にや。などて女を置かさるぞ」と云えば主人も微笑んで、
「否、女房が候いしかども、近頃里へ遣わしたれば、今は小者ばかりに候」と云うに竹世は頷いて、
「しからば寝覚めが淋しからんに、浮世がままになるものならば、当分助けてやりたいものじゃ」と云いつつ、カカとうち笑えば、主人も共に笑いつつ、
「真に宣う事の如し。御身が助けてたまわれば、この上も無き幸いならん」と答えて興をぞ催したる。口と心は裏表（あべこべ）にて、腹の内に思う様、
「・・・・此の島流しの女めが。我に目論みが有るのを知らず、心許して馴れ馴れしげに戯れを云う愚かさよ。やがてぞ思い知らせん」と思う心を色には出さず、なおまめやかに慰めけり。既にして吸物、刺身の肴も種々いで来しかば、盛って出さんとする程に、竹世は又、主人に向かって、
「私は予て伝え聞きしに、この十字堤の辺では密かに酒に毒を加えて人を殺して路用の金を奪い盗る曲者ありと告げたる者がありけるが、ここの酒にも痺れ薬を入れたるにあらざるや。私は悪き酒を得飲まず、良き酒あれば飲ましたまえ」と笑みつつ云えば、主人の男も又、からからと笑いつつ、
「太平の世にいかにして、さる悪事をする者あらんや。良い酒が候が、いささか濁りたりけれども、味わいはちっとも変わらず。それを参らせ候わんか」と問えば竹世は頷いて、
「濁りたりとも味わいが変わらずば、さぁ出しね」と云うに主人は心得て、その酒をぞいだしける。その時竹世は並々と一猪口に受けてとくと見て、
「実に、余程濁りたり。濁り酒は熱燗にて飲む時はいよいよ良し。燗をなおしてたまえかし」と云うに主人は微笑んで、心の内に思う様、
「・・・・この酒には痺れ薬を入れたる故に濁りしを此の女めはなお悟らず熱燗にせよと云う。およそ毒を入れたる酒は温めるほど強ければ、その毒いよいよ印あり。うましうまし」と目算しつつ、自ら銚子を携えて、厨の方へ赴きしを竹世は遙かに見送って、受けたる酒を吸物碗へ押し傾けて、猪口のみをなお手に持って待つ程に、主人は又、忙わしく銚子を引き下げ来にければ、竹世はしきりに舌打ちして、「真にこれは良き酒なり。奇妙、奇妙」と空誉めしたる。
　心を知らぬ善平と実平は初めより引き受け引き受け、たくさんに早二三杯飲みにけり。その時主人は手を打ち鳴らし、「汝らは既に我が謀り事に陥ったり。皆倒れよ」と誇り顔に呼ばれる声と諸共に善平と実平は口中より涎を流して、たちまちはたと倒れしかば、竹世も等しく酒の毒気に当たったる面持ちして、そのままだうと倒れけり。首尾こそ良けれと主人の男は二人の小者に心得さして、まず善平と実平を背戸の物置小屋に抱き入れさせ、又、竹世をも小者らが抱き上げんとしつれども、大盤石（大岩）※の如くにて、ちっとも動かし得ざりしかば、主人はひどく苛立って、小者を罵り押し退けて、ずかずかと立ちかかり、引き起こさんとする所を竹世は早く主人の男の腕を掴んでねぢ倒し、すかさず「がば」と身を起こし、胸逆取って膝に押し付け、力に任して締め付ければ、主人は息も絶え絶えに面色青ざめ眼を見張って、「許したまえ」と叫べども、喉詰まりて声立たず、

されば二人の小者らは此の有様に驚き騒ぎ、走り寄らんとしてけるを竹世はきっと睨まえて、
「汝らがもし▼立ち寄らば、掴みひしいで主人と共にこの世の暇を取らせんぞ」と罵り猛る勢いに、小者はたちまち辟易して腰うち抜かし手を擦って、「許させたまえ」と詫びるのみ。又、栓術も無かりけり。かかる所に表の方よりたくましげなる大女が図らずも帰り来て、事の様子を垣間見けん。走り寄りつつ、うやうやしく竹世に向かい額を突き、
「女中様、許させたまえ。その者は私が為には夫にてはべるかし。大和、唐土昔も今も、世に又、類いあるまじき勇婦人にて御座せしを知らずして形の如く害し奉らんと巧みしは人を知らざる過ちなり。まげて許させたまえかし」と言葉を尽くして詫びるになん。竹世は僅かに手を緩めて、
「さては汝らは夫婦かな。うち見る所、世の常なる悪者にはあるべからず。つぶさに告げよ。いかにぞや」と問いつつ主人を引き起こせば、主人は恥て身をへり下り、しばし頭を上げざりけり。その時女房は小膝を進め声をひそめて、
「今は何をか包みはべらん。私の事は文治の頃、高館にて滅びたまいし、九郎判官義経公の家の子（家臣）なりし、熊居の太郎の孫娘にて、名を青芝と云う者なり。家の後ろに花園あり。春秋毎に切り出して、その草花を売るをもて、世の人私をあだ名して花圃の青芝と呼びなしたり。又、これなる男は判官殿と共に討ち死にしたる和泉の三郎親衡の郎党なりし何がしかの子孫にて、山水天狗損次郎と呼ばれる者なり。共に鎌倉に恨みあれば、いと早くより夫婦になって義兵を起こさんと思えども、しかるべき味方もあらず、人の心を結ばんには財無くては叶わじと思うによって此の所に酒店を出しつつ、路用多き旅人と見る時は酒の中に毒を加えて酔い臥させ、これを殺して金を取らずと云う事無し。しかれども、旅僧と流され人と女は全て害する事無し。なかんづく、流され人には智勇優れし人もあれば、この義を定め置きたりしに、損次郎は欲に迷って、先にも行脚の尼法師が越路よりこの地へ杖を曳きし時、我が店へ憩いしを夫は痺れ薬をもて、彼の尼法師を酔い臥させ、殺さんとしてける折、私が他所より立ち帰り、その尼を見てけるに、只者ならじと思いしかば解薬をもって黄泉返らせて、その俗姓を尋ねしに、彼女は世に聞こえたる花殻の妙達なりき。これにより義を結び、彼女を姉として敬いぬ。その後その妙達は河内の方へ行脚して、青嵐の青柳と諸共に今は金剛山に居り、従う兵が数多あれば、我が方へ来よかしとて、去ぬる頃遙々とここへ書状を寄せられしが、道遠ければ思いかねて、未だ得ならずはべるなり」と告げれば、又、損次郎も、
「それがし眼ありながら、勇婦人とは知らずして、害せんと謀りし事、今さら後悔臍を噛むのみ。先には御身が馴れ馴れしげに、それがしにうち向かい戯れ事を宣いしかば、それがし心にこれを狭み（見下げ）して、用心も無き人なりと思いにければ、痺れ薬を用いんとする心も起こりぬ。許させたまえ」とうち詫びるを竹世はさこそと微笑んで、
「私は男たる者と戯れる事などは絶えてこれ無き者なれども、御身がしばしば旅包みへ眼を付けた気色を察して、故意と油断の体にもてなし、そのせん様をよく見ん為に、しかじかに謀りしなり」と云うに夫婦はいよいよ恥て、既に腹心をうち明かし、
「かく交わりを結びし上は願うは御身の名も素生も知らせたまえ」と他事も無く問われて竹世はちっとも疑義せず、その身の素性を説き示し、姉の仇を討ちし事、この故牡鹿嶋へ流される事の趣を斯様斯様と告げにければ、青芝と損次郎は聞きも終らず驚き感じて、
「さては碓氷の山中にて、彼の大虎を一拳に打ち殺したまいたる竹世の刀自にて御座せしよな。さてもさても」とばかりに夫婦ひとしく敬いけり。

※大盤石（だいばんじゃく）：①大きな岩　②揺るぎないこと。

さる程に青芝夫婦は酒肴を改めて、竹世を奥座敷へ誘いつつ、大方ならずもてなしけり。されば竹世は先の程、この所にて憩いしを善平、実平に相談し、▼この店はひとつ屋にて他に相客もある事無ければ、しばしなりとも竹世殿の首枷を取り除き、ゆるやかに酒を飲ませんとて早く首枷を外せしかば、竹世は起居に不自由無く、思いのままに身を働かして、損次郎を取りひしぎ、その勇力を顕したり。

あだし事はさて置きつつ（閑話休題）、かくて青芝、損次郎らは厚く竹世をもてなして、盃しばしば巡りし時、青芝は竹世に向かって、

「松枝の刀自、愚痴にはべれど、私が云う由を聞きたまえ。御身が牡鹿嶋へ赴いて、配所の住まいを為したまえば艱難云うべうもあるべからず。しばらくここに隠れ居て、金剛山へ赴きたまえ。しからば送りの雑兵を二人共に殺すべし」と云うを竹世は聞きながら、

「真に御身の志、喜ぶべきに似たれども、彼の善平、実平は我らに対して野心無く、長きこの道中をよくいたわりたる者どもなるに、これを殺すは不仁なり。私は日頃、弱きを助け強き者を取りひしげども、悪人を殺すのみで善人を害する事無し。御身夫婦も此の儀をもって、非道の業を止めたまえ。よしや古主の為なりとも、人を殺して物を盗れば、これ即ち盗賊なり。天道いかでか許すべき。願うは二人の雑兵に解薬を飲ましめらせて、私の心を休めたまえ。それに増したるもてなしあらじ」と云うに夫婦は感服して、恥て等しく頭をかき、

「我々は心の迷いによって、道ならぬ業を旨とせし事、いと浅ましくも悔しけれ。今より心を改めて、世に潔白の人となるべし。まず彼の二人の雑兵を黄泉路返らせたまわん」と答えて背戸へ赴きつつ、人斬りまな板へ乗せられたる善平、実平を抱きもて来て、解薬を口に注ぎ入れけり。

しばらくして善平、実平はたちまちに毒気は醒めて、身を起こしつつ辺りを見返り、

「怪しや、ここにて売る酒はあくまで人を酔わせしぞや。さのみ多くは飲まざりしに、前後も知らず酔い伏したり。奇妙の酒にあらずや」と云うに皆々耐えかねて等しくどっと笑いけり。かくて主人夫婦の者は善平、実平にも酒を飲ませて、大方ならずもてなす程に、竹世はその志を感じる余り、遂に青芝と義を結び、姉妹の思いをなすに、青芝は竹世より年二つ三つ勝りしかば、すなわち彼女を姉と呼んで、いよいよ睦み語らいけり。

かくてその日も暮れにければ、今宵はここに止宿と定めて、夫婦は夜飲を催し、ますます竹世をもてなす程に、ややもすれば武芸勇力の事を云い出て、人をうち倒し、人を殺せし物語りして興を催すを方辺聞きする善平らは驚き肝を潰して、安き心も無かりしを竹世は「さこそ」と笑いつつ、

「我々は女なれども、元より武芸を好むにより猛き物語りをしたるのみ、いかにして御身らを害せんと思う心あらんや。ゆたかに酒を飲みねかし」と云うに善平、実平はようやく心落ち着いて、そのもてなしを喜びけり。

かくてその明けの朝、竹世は主人夫婦に別れて、立ち出んとしたりしかば、損次郎、青芝は竹世に十両の金を贈り、善平、実平らにも三両の金を贈りぬ。しかれども竹世は蓄え多くあり、後に入用の事あらん時まで預かり置いてたまえとて、その金を受けざりければ、主人夫婦は強いかねて、しばらくその意に任しつつ、十町ばかり送り行って、遂に袂を分かちけり。

〇さる程に竹世は善平、実平に送られて、その日午の貝吹く頃（正午）※、牡鹿嶋の砦に着きぬ。かくて宰領の善平、実平は砦の役所へ赴いて、鎌倉殿の御下知によって、流人竹世を送り来る事の由を役人に告げ知らせ、忠道の送り手形を渡しけり。そもそも此の所は秋田城之介景盛の領分にて、海上に遠見の砦あり。景盛は在鎌倉なるにより景盛の眼代脇本治部之進という者が此の砦を預かって、数多の兵を従えて、当所の守護たるにより、即ち送り手形を披見して善平らに対面し、竹世の首枷を検めるに、封印切れてありしかば、「この儀はいかに」と尋ねるに、善平、実平は言葉等しく、「長き旅路に候えば、風雨に破れ候のみ。別に仔細も候わず」と云うに治部之進は重ねて咎めず、やがて請け文を書きしたためて、善平、実平らを信濃へ帰し、竹世を流人小屋へ遣わしけり。

※午の貝（うまのかい）：午の刻（正午）を知らせるために吹く法螺貝。

全て鎌倉時代には罪重からぬ咎人を出羽の牡鹿嶋、上総の九十九里浜へ流す▼事あり。されば竹世もその罪が軽き者なりければ、此の所へ流されけり。その時男女の流人どもが幾たりとなく立ち出て、等しく竹世を問い慰め、

「御身は他郷の人なれば、島の掟を知らざるべし。およそこの地の流人預かりを嶋守鵜太夫と唱え申すが、その下役に渋坂板兵衛と云う人あり。御身に蓄えの金あれば、早く渋坂殿に五両ばかり参らせたまえ。かくて又、五両の金を島守り殿に贈る時は掟の鞭を免れて、僅かにつつがなかるべし。心得たまえ」と囁き示すを竹世は聞きつつ頷いて、

「各々が心付けられるは喜ばしくはべれども、板兵衛にもせよ土兵衛にもせよ、彼らが真の道をもて良く私を憫れめば、五両の金を遣わすべし。もし又、曲がれる心にて権威を振い罵り脅せば、私決して一文のびた銭なりとも、其奴らに取らせる事はすまじきものを」と云うを皆々聞きながら、

「それは良からぬ了見なり。郷に入っては郷に従う浮世の習いなるものを彼の人々に盾つくは自ら命を捨てるに同じ。かく云う由は我らも御身も同じ流人の事なれば、同病は相憐れむ真心にこそはべるなれ。必ず悪くな聞きたまいそ」と皆口々に諌める折から、早くも来る渋坂板兵衛、眼を見張り、声厳めしく

「新参の流人の竹世とやらんは何処に居るぞ。さぁさぁいでよ」と云うに皆々驚き恐れて「そりゃこそ、鬼が」と身を縮まして、左右へぱっと退きつつ、砂に額を堀り埋ずめ、等しく恐れ敬いけり。されども竹世はちっとも騒がず、進みいでうち向かい、「新参の流人竹世はここに在り」と云わせも果てず、板兵衛はきと睨まえて、声を振り立て、

「汝は碓氷の山中にて、彼の大虎をうち殺せし、ちとの勇気のある者なりとも、既に此上無き罪を犯して嶋流しになりたれば、鼠なりとも汝の為にうち殺される者は無し。しかるを何ぞや猛々しく、我らに対して不礼の振る舞い。身の程知らぬ馬鹿者なり。三拝せずや」と息巻いて、噛み付く如く罵りけり。

傾城水滸伝　第六編ノ二　曲亭馬琴著　歌川国安画

されども竹世はちっともひるまず、板兵衛をぎと見上げて、

「和主今、故も無きにあくまで私を罵るは強持てにして五両の金を取らんと欲する為なるべし。和主が私を哀れんで権威を振るう事無くば、金を贈らんと思いしかども、我が贈り物が遅いとて、あくまで罵る非道の振る舞い。それを恐れる竹世にあらず。罵られては三文でも、和主に取らせる銭は無し。出直したまえ」とあざ笑えば、板兵衛は呆れ果て、再び是非の問答に及ばず、そのまま踵を巡らして元の来し方へ馳せ去りけり。

　その時数多の流人どもは竹世の辺へ進み寄り、

「などて御身は板兵衛殿を云い恥ずかしめたまいたる。彼の人定めて上役の島守り主に讒言して、御身を殺さんとこそ謀るらめ。さて苦々しき事かな」と皆口々に諭せども、竹世は悔やまず笑いつつ、

「人の命は天に懸かれり。彼らが邪、非道をもて、我を殺さば死なんのみ。今更に命を惜しんで曲がれる人に諂わんや」と答える言葉も終わらぬ折から雑兵二人が走り来て、

「新参の流人女の竹世とやらんは汝よな。島守り殿の呼ばせたまうに、さぁさぁ参れ」と引き立てて、役所の方へ帰って行きけり。

〇かくて二人の雑兵はしきりに竹世を急がして、島守りの屋敷へ引き立て来て、局の辺へ引き据えてしかじかと聞こえ上げれば、流人預かり島守り鵜太夫が下役の渋坂板兵衛を従えて、奥の方よりしづしづと出て床机に尻をうち掛けて、

「流人竹世、承れ。汝は此上無き罪を犯して当国へ流されしに、未だ前非を悔いずして女に似気無き大胆不敵、類い稀なる曲者なり。先の右大将頼朝公の御時に▼定め置かせたまいたる此の島の掟あり。およそ初めて流され来る流人どもには背を一百鞭打って、その向後を懲らさせたまうを殺威棒と名付けたり。汝も初めて当所へ来れば殺威棒を受けるべき者なり。まずよくこの儀を心得よ」と云えば竹世は頭をもたげて、

「仰せは承りはべりにき。島の掟であらんには幾ばくなりとも打たせたまえ」と云うに鵜太夫は声苛立てて、「そはもちろんの事なりかし。者ども竹世をさぁさぁ打てよ」と激しき下知に雑兵らは藤葛を掛けたる寄り棒※を手に手に取って立たんとしつつ、各々心に思う様、

「・・・・此の女の情の剛さよ。身内に血の無き男でも殺威棒にて打たれる者は肉破れ骨砕けて、即座に死なずと云う者無し。云わんや是は女の事なり。心ばかりは猛くとも、いかにしてこらうべき。打つ数半ばにだも到らず、たちまち命終わるべし。さて苦々しき事かな」と思えばさすがに哀れんで、左右無くは打たざりしを竹世は早く見返って、

「などて各々は打ちたまわざる。百は愚か千も二千も、くたびれるまで打ちたまえ。そを苦しきとて一声にても叫べば、人たる甲斐も無し。力のありたけ身を入れて、しっかりと良く打ちたまえ」と云いつつ、その身を突きつくれば、鵜太夫は憎さも憎しと再び声を振り立てて、「者ども、などて猶予する。さぁ打たずや」と苛立てば、板兵衛も又、方辺より

「人々、日頃に似気無く、其奴の口に恐れしか。島守り殿の仰せなるに、押し伏せて打ち懲らさずや。早く早く」と急がしたる激しき指図に雑兵らは各々鞭を取り直し、竹世を打たんとする折から、年十七八なる一人の女が身の丈高く甲斐がいしげに若衆めいたる顔容なるが、小鬢の辺りにかさもやあるらん、白布をもて鉢巻きしたる身の様も卑しからぬが、障子の陰より立ち出て、忙わしく鵜太夫の辺に寄って、何事やらん言葉せわしく囁いて、そのまま奥に入りにけり。

既にして鵜太夫はその女が囁きし時、一人しきりに頷きしが、たちまち声を掛け、
「やよや者ども、しばらく待て。その竹世は道中にてひどく病み患いたるが、未だ本復せざる由、予てその聞こえありしを事にまぎれて忘れたり。その身につつがある者は病全快いたすまで殺威棒を容赦する事。またこれ当所の作法なり。かかれば今日はまず許し、本復の後に打つべし。皆、引け引け」と下知すれば、雑兵らは一議に及ばず、「承りぬ」と答えつつ退かんととしてけるを竹世は急に呼び留めて、▼
「私は一日も道中にて患ったる事は無し、今既に打たんとしつつ、打たずして止められては奥歯に物の挟まる様にて、なかなかに心良からず。やはりそのまま打ちたまえ。手温い人じゃ」とうち笑えば、雑兵らは退きかねて、又、左右より立ちかかるを鵜太夫は再び呼び留め、
「者ども竹世が云う事を必ず真と思うべからず。彼女は熱にうかされて、譫言を云う者なり。流人小屋へ連れて行き、よくいたわって保養させよ。病全く癒ゆるを待って、打たん事遅きにあらず。さぁさぁせずや」と哀れみの始めにも似ぬ上役の指図は訳ある事にこそと、既に察せし雑兵らはつくに異議無く答えをしつつ、立たじと争う竹世の腕を左右より引き立てて、是非を云わさず両三人して流人小屋へぞ遣わしける。
されば又、板兵衛も鵜太夫の計らいを心得難く思えども、由を問わんはさすがにて、おめおめとして退きけり。

※寄り棒（よりぼう）：捕り手が、相手の刃物を払い落とするために使う棒。

〇さる程に流人どもはうち殺されんと思いたる竹世が今つつが無く、雑兵らに送られて流人小屋へ返されしを見つつ心にいぶかって、皆その辺へ集い来て、事の訳を尋ねれば、竹世は有りし事の趣を斯様斯様と答える折から、更に一人の雑兵と一人の下部が連れ立ち来て、竹世を呼んで告げる様、
「そなたの住まいを替えよとある。島守り殿の仰せなり。もて来る所持の物あれば、取り落さぬ様にして全て此方へ渡し候え。さぁさぁ」と急がし立てれば、竹世はその心を得ず、元の所へ退いて、流人どもにしかじかと事の由を告げ知らせ、
「今、故も無く私一人を引き離し、他所の小屋へ遣わすのは是もまた必ず訳のあるならん。各々何と思いたまう」と問うを皆々聞きながら、
「そは必ず、土の牢へ御身を入れん為なるべし。およそ流人で銭無くて贈り物を贈らぬ者は土の牢へ入れられて、日に只一度の糧ならでは湯も水も与えられず、その牢へ入る者は一年二年経つや経たぬに、死なずと云う者ある事なし。さてもさても」とばかりに等しく嘆息したりける。
竹世は「さこそ」と頷くのみ、なかなかに覚悟を極めて、すなわち所持の風呂敷包みを持て出て渡しにければ、下部はこれを受け取って、雑兵と諸共に後に立ち、先に進んで、竹世の為に案内をしつつ、伴い行く事十町ばかり、人の別荘などにやあるらん、一構えの屋敷の内に囲いめきたる小座敷あり。ここへ竹世を案内して、雑兵下部は出て行きぬ。
この所の体たらく、六畳に五畳の次の間さえあり、厠、湯殿には泉水、具足せずと云う物無し。まいて家の内の造作は床違い棚、夜の物を納める所、網代天井、蒸し襖、炉には釜を掛け、洗茶の一具を▼ものしたり。京鎌倉にてこれを云えば、貸し座敷など云うものめいて流人を置くべき所に非ず。竹世はこの体たらくに心得難く思えども、とてもかくても命運がここに尽きたる我が身ならば、良きも悪きも今更に厭うものかと思い捨て、この所に居る程に、早夕暮れになりしかば、その下部が

御膳籠※に仕出しの夜食を入れたるを持て来つつ竹世に云う様、
「島守り殿の仰せにて候。既に時分にもなって候えば、物欲しくこそ御座すらめ。夜食を参らせ候なり。いざいざ」と云いながら、携え来たる籠の内よりいと奇麗な膳椀を取り出して、汁は小鍋に入れたるを炉の火にかざして此れを温め、その余、平猪口、焼き物なんどを膳の辺に置き並べ、給仕をしつつすすめけり。

竹世は信濃に在りし時にも、かかるもてなしに会いし事は稀なり。まいて流人になりし我が身にかくまで馳走せられる事、いよいよ持って心得難し。思うに美食をあくまでにかふて我が身を肥え太らせ、その後に新身の刀の試し物にするにやあらん。さもあればあれ、このもてなしを否まば、臆したりと云われん。思いのままに飲み食いして、なお又、彼らがせん様を見るこそ良けれと思案をしつつ、その下部にうち向かって、
「この夜食の品々は実に是、島守り主より賜る物にてはべるにや。和殿は何と呼ばれる人ぞ。門違いにはあらずや」と云うを下部は聞きながら、
「否、我らは島守り殿の下部にて、僕介と呼ばれる者なり。竹世に夜食をすすめよと仰せられて候えば、いかでか間違い候べき。さぁさぁ召され候え」と云うに竹世は又、更に問う由も無く膳に向かって、物一つ漏らす事無く食べ果てて湯を乞えば、下部は又、籠の内より吸筒に入れたりける酒と肴を取り出して、これをも竹世にすすめけり。

竹世は元より好める酒なり。今更辞する事かわと思えばやがて盃を引き受け引き受け飲みにけり。かくて酒食も果てしかば、僕介は忙わしく膳椀皿鉢を取り納め、小戸棚の辺より行灯を出し来て、灯蓋に油を注いで暇乞いしつ、その籠を引き担いでぞ帰りける。

この日も程無く暮れしかば、竹世は行灯に火を灯し、さぁ眠らばやと思いしかば、次の間の戸棚の戸をやをら引き開け内を見るに、新しき夜衣、布団あり。いぶかしき事、限りも無けれど、引き出して敷き設けて、その夜はゆたかに眠りけり。

※御膳籠（ごぜんかご）：竹で方形に編んだ籠。料理屋で料理を入れて運ぶ。

これよりして日毎日毎に僕介は竹世の為に三度の膳を持て来つつ、すすめずと云う事無し。これのみならず昼飯果てて、未の頃になる毎に一土瓶の煎茶、一皿の菓子を持て来て竹世にすすめ、夕暮れ毎には酒肴を携え来て、すすめざる日は無かりけり。およそ朝飯と夜食には一汁三菜、昼飯は一汁五菜なりけるが、料理に心を用いけるにや、魚類は新しきを旨として同じ物を二度使わず、その塩梅も田舎に似気無く、旨からずと云う物無ければ、竹世はいよいよ身を肥やさして試し者にするならんと思いにければ、ちっともいろはず、そのもてなしを受けたりければ、衣食住に事足りて十日余り過ぐす程に、一人徒然に耐えざれば、或る日浦曲に立ち出て漫ろ歩きをする程に、東の磯辺に天王の社あり。

この所の鎮守なるべし。鳥居の辺にいと大きなる▼石の狛犬あり。その台もまた一つ石にて造りなしたる物なれば、いかばかりの貫目あるらん。良き石もあればあるものかなと思えばしばし佇んで、よく見て西の方に赴けば、男女の流人が幾たりと無く、或るいは潮を汲み取って、肩もたゆげに担うもあり。或るいは磯へうち寄せたる流れ木を引き寄せて、からげてこれを背負うもあり。或るいは小魚を裂き開き、干して干物に作るもあり。この時は既に早秋も八月の初めなれども、残る暑さの耐え難きに一人として暇無く、流れる汗を拭いあえず、いと苦しげなる有様なれば竹世は哀

れみ立ち寄って、
「和主たちいかなれば、良き程にして休みはせで、息も継ぎあえず稼ぐぞや」と問うを見返る流人どもは言葉ひとしく答える様、
「我々が日毎日毎にこれらの業をなすものなれば、これ極楽の境涯（境遇）※なり。始め流され来る時、彼の贈り物を贈る事の得ならぬ者はたちまちに土の牢へ入れられて、日の目をだに見る事ならず。上を見れば限りも無きを流人と云うは名のみなる御身の如く安楽にて、天の下の幸いを得たらん人が幾たりあるべき。あなしんどや」とぞ呟きける。竹世は「さこそ」と思うにも、安穏なるか災いか、我が上ながら、いとどしく心得難く思うのみ。この所を立ち去って、その宿所へ帰りにければ、又、彼の下部僕介は担い桶に湯を汲み入れしを背戸の方よりかき持て来て、湯殿の盥に移しつつ、竹世に請うて湯を浴びせつつ、背の方に立ち寄って、垢をかきなどしたるもてなし。いよいよ念ごろなるは我が身の垢を流し清めて新身を試す用意にこそ。かかれば死後は近づきぬと思う竹世はちっとも騒がず、早湯浴みしていでにければ、僕介は夕膳と酒肴を携え来て、「いざ」とて竹世にすすめれども、竹世はこれを押し退けて、僕介にうち向かい、
「私只今問う由あり。和殿が包まず告げ知らせれば、この膳を賜るべし。もし又、包み隠せば、私は決してこれを食べず。和殿は実に島守り殿の身内人なりけるか。何らの故に此の日頃私をもてなしたまうやらん。定めて深き訳あらん。つまびらかに告げたまえ。これらの訳はいかにぞや」と問われて僕介は頭をかき、
「先にも既に告げ申せしに、などてやさのみ疑いたまうぞ。拙者（せっしゃ）は島守り殿の下部にまぎれ候わず。又、御身をかくの如くもてなしたまうは予ねてより大旦那の一人子の嬢様の指図によれり。先に御身が殺威棒にて打たれんとしたる時、奥より出て親旦那に囁き止めたまいしが、これすなわち嬢様なり。

※境涯（きやうがい）：生きていく上で、人がおかれている立場。境遇。

そもそもその▼嬢様はその名を紫苑と呼ばれたまうが、女に似気無く武芸を好んで男勝りの力あれども、顔容は醜からず、御歳は十八にて良き乙女に御座するものから、心は猛く男に似たれば、世の人々があだ名して二藍の紫苑と呼びなしたり。さればこの嬢様が予ねて我らに宣いしは我れ思う由あれば、今よりおおよそ半年余り、日毎に竹世をもてなして、心のままに保養させれば、衰えたる身は自ずから力付く事なからずや。既にして彼の女の肥え脂付く時に至って、我欲する事の由を告げ知らして語らうべし。その折まではこれらの由を秘めて、彼の人にな知らせそと仰せられて候が、そは何事に候やらん。訳は得知らず候」と云うに竹世は頷いて、
「しからんにはその嬢様をこの所へ伴って、私に対面させよかし」と云うを僕介は聞きながら、
「その儀は許させたまえかし。予ねてよりこの事を御身に告げなと云われしに、今しかじかと申せば、拙者は大方ならぬ各めをこそ被らめ。只、勘弁を願うのみ」と云わせたまはず、声苛立てて、
「和殿がその儀を請け引かずば、我が身は飢えて死するとも此のもてなしを受け難し。さぁさぁ持って帰りね」と云いつつ、やがて身を起こし、外の方指していでんとするを僕介は急に押し止め、
「かくまでに宣えば、我が身はとなれかくもなれ、嬢様にしかじかと申して伴い候わん。まず早箸を取らせたまえ」と詫びつつようやく押し鎮め、母屋の方へ赴きけり。

かくて下部の僕介は止む事を得ず、母屋に至って、竹世が会わんと云いける由を主の娘紫苑に告げて、身の怠りを詫びしかば、紫苑は慌てふためいて、竹世の宿所へ出て来て、忙わしく膝折り伏して、

「松枝の刀自、此の頃の無礼を許したまえかし。私はすなわち紫苑にはべり」と云いつつ、やがて額突いて、うやうやしく拝しにければ、竹世は驚き走り寄り助け起こして上座に押し上し、

「嬢様などて流人の私をかくまで敬いたまわする」と云うを紫苑は押し止め、又、へり下り額を突き、

「松枝の刀自いかなれば、さまで謙退（謙遜）したまうぞや。御身は義勇の婦人なり。彼の碓氷の山中にて虎を手討ちにしたまいたる武勇はここへも早く聞こえて、いと懐かしく思いしに、その罪にあらずして、この地へ流されたまいしかば、対面して年頃の志を告げばやと思うものながら、身の内に受けたる傷あって心に任せず、この頃ようやく癒えたれども、まずよく御身を養って気力本復したまえば、その折に対面して我が願事を語らわんと予ねては思いはべりしに、卑しき者が口さがなくて、御身に聞かれて今更に面目も無くはべるかし」と云うを竹世は聞きながら、

「私はかくとも知らずして、日頃御身の養いを受けし恩義がはべるものをよしや命を失うとも、ちとの報いをせざらんや。私は信濃に在りし時、久しく牢屋につながれて、更に又、遙々とこの地へ流され来つれども、幸いにしてつつがなく、気力はいよいよ健やかなり。用いられる事あれば、早くその訳を告げたまえ。いかでか半年三ケ月の後を待つ事はべらんや」と云うに紫苑は喜んで、

「既に御身につつが無く、気力衰えたまわずば、事の由を告げはべらんが、この所は私の親の別荘なれば、道の程も遠からず、親にてはべる鵜太夫にしかじかと告げ知らせて、さてその後に御身を労する事の訳を申すべし。まずまずそなたへ進みたまえと、上座に押し上げて、世に隔て無く語らう折から、主人島守り鵜太夫も主屋より出て来て、竹世に向かって慇懃に、

「それがし今日より▼役義を離れて、娘の為に御身の力を頼みたき一議あり。やはりそのまま安座して、一下りを聞きたまいね。そもそもそれがしの娘の紫苑は稚けなきより武芸を好んで男勝りの力あり。さるにより婿取りして男に連れ添う事を欲せず。それがし天性不幸にして家を継ぐべき男子無く、只この紫苑のみなるが妻は先立ち世を去りたり。いかで娘の願いのまにまに世を渡らせんと思いしかば、去ぬる年この所より程遠からぬ蝙蝠と云う里に三町四方の屋敷を求めて、武芸の稽古所を設えて、又、その傍らに酒店を開いて造り酒を商わせ、紫苑を彼処へ遣わして、武芸の師範をさせたるに、今の世は女と云えども武芸を嗜む習いなれば、教え子も数多付き、酒店も繁盛せしに、思い掛け無き災い起こりて、紫苑は頭に傷を受けて彼の家屋敷を失いぬ」と告げれば紫苑も膝を進めて、

「只今父の云いつる如く、私は蝙蝠の里にあり、思いのままに世を渡りしに、近頃彼の里の領主替わって、横島慊杖照行と云う武士が鎌倉より入部したり。しかるにその慊杖照行は野衾と呼ばれたる一人の大女を伴い来つ。此の野衾と云う女は五十人の力あり。武芸、角力、柔の術まで、鍛錬せずと云うこと無し。これにより人あだ名して毛門神野衾と呼びなしたる真に希代（稀有）の曲者なり。かくてその野衾はある日私の稽古所へ来て試合を望みはべりしかば、私すなわち野衾と柔の勝負を試みしに、私はひどく投げ伏せられて、頭に傷を受けたりき。これにより野衾は私の稽古所を奪い取り、酒店さえも横領して、傍若無人に振る舞えども、私の力が足らざれば、彼女と争う事叶わず、遂に家屋敷を失って、世に耐え難き恥じ忍ぶ遺恨やる方無き折から、御身当所

へ流離いたまえば、いかで一臂（僅か）の力を借りて、彼の野衾を打ち倒し、日頃の恨みを返さんと思うものながら、野衾は世の常の相手にあらず、御身の気力を養って、その後頼み参らせんと思いし故に事訳を得告げざりしを許したまえ」と云えば、又、鵜太夫も、
「彼処は他領の事なるに、それがしの娘を遣わし置きしは皆内證（内緒）の事なれば、公へ訴え申して遺恨を晴らす事も得ならず、この義を察したまえかし」と云うを竹世は聞きながら、歯を食いしばり拳をさすって、
「その毛門神ンと云う女めは三面六臂ある者にや」と問えば紫苑は頭を振って、
「いかでか三面六臂もあらん。一つの面に二つの手のみ」と云えば竹世は笑いつつ、
「しからば彼女も同じ人なり。よしや万夫の力ありとも、打ち倒さん事は容易すかるべし。明日は未だきに蝙蝠の里に赴きはべるべし。御身は案内をしたまえかし」と云うに親子は喜んで、又、主屋より酒肴を取り寄せてもてなすにぞ、竹世は紫苑に対面して事の由を聞きしより、既に心に勇みがあれば、およそ飲むと飲む程に、十銚子余りを尽くしたり。その時鵜太夫は竹世に請うて娘紫苑と姉妹の義を結ばせ、すなわち竹世を姉と頼んで盃を取り交わし、行く末までと契りけり。
　さる程に竹世は既に、ほろ酔いの酒機嫌に任しつつ、
「いざや、そこらへ立ち出て、今宵の月を眺めん」と云うに紫苑も鵜太夫も「しかるべし」と答えつつ、僕介ら両三人の下部どもを従えて、浜辺の方へ立ち出て、漫ろ歩きをする程に、来るとは無しに天王の社の▼辺に来にければ、竹世は先に見て置きたる石の狛犬を指差して、
「この狛犬は台までも一つ石にて彫り抜きたりと見えしは僻目（見間違い）にはべるにや。およそ重さはいかばかりの貫目もやはべらん」と問えば、鵜太夫、紫苑らも諸共に佇んで、
「この石の狛犬は重さ二百貫目ありと昔より云い伝えたり。台まで一つの石なれば、偽りにはあらざるべし」と云うに竹世は微笑んで、
「島守り主も紫苑女らも私の力が衰えたらんと危ぶみたまうをさは非ずと云えど、正しき証拠無し。この狛犬を持てるや否や試みはべらん。待ちたまえ」と云いつつ、やがて立ち寄って、その石に手を掛けて、押し動かして頭を打ち振り、「否、此の石は持ち難し」と云えば親子は笑いつつ、
「御身あくまで力ありとも、二百貫目ある石をいかにして持たるべき」と云えば竹世はにっこと笑みて、
「持ち難しと云いつるを真としたまう愚かさよ。さらば持って見せ参らせん。いでいで」と云いつつも、左右の袖を巻き上げて、その石に諸手を掛けて、軽々と引き起こし、「ヤ」と声掛けて目より高く差し上げて、しづしづと辺りを三遍うち巡り、たちまち虚空へ投げ上げて、両手にやわらと受け留め、又、投げ上げては丁と取る。その体たらくは手鞠なんどをもて遊ぶに異ならず。又、取り直して元の所へ、そのまましかと押し据えるに、顔の色ちっとも変わらず、手ばたきしつつ退くにぞ、鵜太夫親子、下部は更なり、折節辺りに居たりける流人どもさえ、これを見て肝を潰さずと云う者無く、
「真にこの竹世の刀自は幾百人の力あるらん。近き世の巴御前、板額なりともいかでか及ばん。さてもさても」とばかりに、等しくどっと誉める声、しばしは鳴りも止まざりけり。

　かくて紫苑、鵜太夫は竹世を主屋へ伴って、再び酒宴を催ししつつ、いよいよ竹世をもてなしければ、竹世はひどく酩酊して、明日は必ず蝙蝠へ赴き、毛門神野衾を打ち倒しはべらんと約束し

つつ、別荘へ帰るとやがて臥しにけり。

〇かくてその明けの朝、四ツの頃ようやくに竹世は目覚め起きにければ、僕介はすなわち朝飯を持ち運びしてすすめけり。その時紫苑は主屋に在って父の鵜太夫と談合する様、
「竹世の刀自は昨夜よすがら、あくまで飲んで酔い臥したれば、今日一日は休ませて、明日明後日の頃、蝙蝠へ案内するこそ良からめ」とて、紫苑は一人別荘へ赴いて、竹世に云う様、
「姉御前、今朝未だきより人を蝙蝠へ遣わして、毛門神が宿所に在るや否やの由をうかがわせしに、野衾は他所へ行きたり。明日ならでは返らずと云う風聞定かに聞こえたり。かかれば今日は行くも要なし。明日とく彼処へ赴きたまえ」と云うに竹世は舌打ち鳴らして、
「彼奴が宿に居らずと聞いては今日は思い留まるべし。明日の用意をしたまえ」と答えて、その日を暮らす程に、紫苑は又、主屋より折々酒肴をもたらして竹世にすすめさせたるに、その肴は多けれども酒は僅かに一合余りを銚子に入れて贈りにければ、竹世はこれをいぶかって、彼の僕介を呼び留め、
「今日に限っていかなれば、肴のみ多くして、この酒の少なきや」と問えば僕介は声をひそめて、
「これには故ある事になん。嬢様の宣いしは御身が今日も酔いたまはば、明日の用に立ち難らん。今日は酒を少なくせよと、仰せられて候」と云えば竹世はあざ笑い、明日を遅しと待ちにけり。

〇されば竹世はその次の朝早くに主屋へ赴いて、紫苑に会って、「蝙蝠へ行くべし」と催促す。その時▼紫苑は朝飯を竹世にすすめ、酒をすすめて、その手配りを談合するに、竹世はこれを聞きながら、
「私は一つの願いあり。ここより蝙蝠へ行く道に幾軒の酒屋ありとも、一軒毎に立ち寄って、五合づつ酒を飲むべし。かくせざれば思いのままに毛門神を打ち倒し、御身の恨みを返し難し」と云うに紫苑は笑いつつ、
「そはいと易き事ながら、蝙蝠までは二里の道あり。その道すがらにある酒屋は十二三軒にも及ぶべし。さるをその酒屋毎に五合の酒を飲みたまえば、彼処へ走り着く頃は泥の如くに酔いたまいて、物の用には立ち難からん。この儀ばかりは請け引き難し」と云えば竹世は笑いつつ、
「御身は未だ知りたまわじ。私は五合の酒を飲めば、すなわち五合の力あり。一升二升飲む時は又、それほどの力を増す。まいて一斗も飲む時は力の出る事限り無し。さるにより碓氷にて虎をうち殺せし時も、あくまで酒に酔いたればこそ十分に仕終せたり。さのみ危ぶみたまうな」と云うを鵜太夫は聞きながら、
「かく云われれば、その意に任せて酒を飲ませ参らせよ。さりながら彼処の酒は皆地酒にて、味わい悪し。我が家には良き酒あり。そを四五升もたらして、道で酒屋を見る毎に、五合づつすすめよかし」と云うに紫苑もその儀に任して、僕介らの下部一両人に弁当と酒樽をもたらしつつ、遂に竹世とうち連れ立って、蝙蝠の里へ赴けば、鵜太夫は二三十人の雑兵を後より付けて、加勢の為に遣わしけり。

〇かくて竹世は道すがら、酒屋、酒屋へ立ち寄って、肴を求めて用意の酒を五合ずつ飲みしかば、蝙蝠の里へ近づく頃には五升樽を傾け尽くして、早十分に酔いにけり。されば竹世は蝙蝠の里の入

り口に紫苑を残して、一人野衾の宿所に赴く道に秋の森と呼びなしたる紅葉のみの林あり。この所より野衾の武芸の稽古所へ遠からずと予ねてより聞きたるが、林の内の茶屋の床机に肥えていかめしき大女が尻を掛け、紅葉を眺めて、茶を飲んで居たりける。竹世はつらつらこれを見て、彼奴は必ず野衾ならんと思えども、便を得ざれば、稽古所に程近き野衾の酒店に赴いて、床机に尻をうち掛けて、酒をいだせと呼び張りければ、此の店の小者両三人あり、一人が早く出迎えて、

「ここではい酒を仕らねば、肴はこれなく候えども、酒ばかり買いたまえば、いかばかりにても参らせん」と云うを竹世は聞きながら、

「肴が無くは酒ばかり多少を問わず、さぁさぁ出せ」と云うに小者は心得て、二合の酒を地爐裏に燗して、猪口を取り添え持て来にければ、竹世は手酌に一口飲んで、「この酒は甚だ悪るし。なお良き酒と取り替えよ」と云うに小者は止むことを得ず、店を預る野衾の男妾に由を告げて、「なお良き酒に取替えてたまわれ」と云いければ、男妾は頬膨らして、「それより他に良き酒無し」と云うを小者は押し返し、

「あの女中は既に早濁酒酔っている事なれば、まげて取替えたまえかし」と云うにくどくど呟きながら、なお良き酒を注ぎにけり。竹世はこれを一猪口飲んで、

「此の酒もまだ悪し。なお良き酒をいだせ」と云えば小者はこれを聞きながら▼

「此は一番の良き酒なり。これより他に候わず」と云うを竹世はあざ笑い、

「只二種の酒ばかり売るとは吝なる酒屋なり。しからば帳前に居る若い男よ、ここへ出て相手になれ。さぁさぁ来ぬか」と罵れば男妾はうち腹立って、

「食い倒れの女めが悪く騒ぐと用捨はせぬぞ。足元の明るい内、失せ居らぬか」と息巻くにぞ、竹世はますます怒り狂って、

「この二才めがほざいたり。その儀ならば手並みを見せん。そこな退きそ」と勢い猛く走りかかって、その男をかい掴み、礫に取って、矢声を掛けて、店にある一石余りの酒桶へ、たちまちざんぶと投げ入れたり。思うに増したる勇力に驚き騒ぐ小者らは手に手に棒をおっ取って、うち倒さんとひしめくを竹世は得たりと飛鳥の如く、日頃の手並みを現して、或るいは蹴倒しかい掴み、一石桶へ投げ入れ、投げ入れ。店にありける酒樽の飲み口を皆払いにければ、酒はさながら泉の如くほとばしり。おし流されて、木履（下駄）も浮いて漂いけり。既にして男妾と両三人の小者らは酒浸しになる苦痛に耐えねども、桶深ければ出る事叶わず、その中に只一人ようやくに逃れ出て、野衾にかくと告げしかば、▼毛門神野衾は宙を飛んで走り来て、はや近づかんとする程に、竹世はこれを見返って、

「彼奴は必ず野衾ならん。広みへ出てうち倒さずば、辺りの人に見せ難し」と思案をしつつ、外の方へ走り出て待つ程に、既に近づく野衾は怒れる声を振り立てて、

「命知らずの盗人女めが、人皆恐れる我が店を己はよくも壊したな。覚悟をしろ」と罵って、打たんと進むを引き外す、竹世は早く足を飛ばして、さしもに逸る野衾の脾腹をはたと蹴てければ、急所の打ち身に野衾は一声「あっ」と叫びもあえず、たちまちに仰け反る所を竹世は得たりと拳を固めて、眉間をはたと打ち倒し、右の足にて胸先を力に任せて踏み据えけり。なおつぶさには五の巻に見えたり。

傾城水滸伝　第六編ノ三　曲亭馬琴著　歌川国安画

　その時竹世は野衾の胸先を踏み据えて、
「大悪人め、思い知るや。この所の稽古所も酒店も元は我が友の紫苑の物でありけるを汝が奪い取りし事は誰とて知らぬ者も無し。よって我今ここに来て、紫苑の為に恨みを返す。手並の程は知りつらん。私を誰と思いたる。碓氷峠で大虎を手討ちに殺せし我なるに、汝ら如き弱虫女をひねり殺すに手間暇入らず。汝もし前非を悔いて、稽古所も酒店も紫苑に返せば命を助けん。一言なりとも抗えば、今踏み殺すぞ。いかにぞや、否か応か」と責められて、野衾は苦痛に得耐えず、この時初めてこの女を彼の虎を討ち殺せし竹世なりきと知りてければ、いよいよますます驚き恐れて、弱り果てたる声を震わし、
「姉御前、命を助けたまえ。稽古所も酒店も元の主に返すべし。許したまえ」とうち詫びるを竹世は「さこそ」と微笑んで、
「しからば汝が三か条の誓いを為せば許すべし。第一は稽古所と酒店を元の如く諸道具までも差し添えて、只今紫苑に返すべし。さてその次には汝の武芸の弟子は更なり、およそこの里の男女の腕立てを好む者をこと如く呼び集め、紫苑の物を横領したる過ちを告げ知らせ、その人々も諸共に紫苑に詫びて後の後までの証人に立たすべし。さて第三には汝は眷属どもを引き連れて、今宵の内にこの里を速やかに立ち退くべし。もし又、遠く去らずして近在に隠れ居らば、見かけ次第に討ち殺さん。この三が条を一つも違えず、よく守らんと云う誓いを成せば、此の度はまず汝を許さん。いかにいかに」と責め問われて、野衾は心に思う様、
「・・・・・とてもかくても、此の竹世に勝ちを▼取ること叶い難し。しばらく彼女が云うに任して、その後に又、栓術あらん」と思案をしつつ声振り絞り、
「姉御前、その三ヶ条を一つも違えず守るべし。まず早起こしたまいね」と誓いをしつつ詫びにければ、竹世は僅かに退いて、肩先取って引き起こす、折から紫苑は二三十人の雑兵、下部を引き連れて、此の所へ走り来にければ竹世は野衾にうち向かい、
「汝は紫苑に三拝して、成せし悪事を詫びよかし」と云うに野衾は否むに由無く、恭しく額を突いて、
「二藍の君、これまではさぞ御腹が立ちつらん。稽古所も酒店も御身に返し奉りて、私は遠く立ち去るべし。何分許させたまいかし」と云いつつ額を堀り埋ずめ、しばし頭を上げざりけり。

〇かくて竹世は野衾を先に立てて、紫苑らと諸共に又、彼の酒店へ行って見るに、野衾の男妾と両三人の小者らはなお酒桶より出る事得ならず、皆酒浸しになって苦しみ居たるを雑兵らに引き上げさせけり。その時野衾は更に人を走らせて、武芸の教え子と里にて口利く男女を呼び集めるに、一人も落ち無く来にければ、竹世はその人々に野衾の悪事を告げて、
「速やかに此の里を追い払うものならば、かたの如く和睦すべし。この儀を計らいたまえ」と云うに諸人は異議無く請け引いて、野衾の為に詫言して、いよいよ和談整いけり。
　さる程に野衾は武芸の稽古所と酒店の諸道具を皆目録に書き載せて、これを紫苑に返しつつ、その身は眷属を引き連れて、行方も知れずなりにけり。

〇されば又、紫苑の父の島守り鵜太夫は竹世が野衾を討ち倒して、物皆取り返したる由を聞くと、そのまま馬を跳ばして、その夕暮れに走り来つ。既に竹世の武勇によって、野衾を追い払ったる事の趣をつぶさに聞いて喜ぶこと大方ならず。その夜はその稽古所に止宿して、終夜酒宴を催し、をさをさ竹世をもてなして次の日牡鹿嶋へ帰りけり。

〇これよりして竹世は紫苑と共に武芸の稽古所に居り、日毎に酒を酌み交わし、喜びを尽くす程に、遠近の里の男女は竹世の武芸勇力を伝え聞き、伝手を求めて交わりを結ばん事を請い願い、初め紫苑の武芸の弟子が野衾に従いたるも皆前非を悔いて、再び紫苑を師匠と頼みしかば、武芸の稽古所は更なり。彼の酒店も繁盛しけり。紫苑は先の恥を清めて、女主人の心任せに世を安く送る事、皆これ竹世の恩なればとて、親の如くに敬いけり。かくてその後、紫苑はあちこちへ人を遣わし、野衾の行方を探り求めしに、彼女は何地へか行きたりけん、行方知れずと聞こえしかば、いよいよ心を安くして、彼女は他国へ赴きたらんとて▼遂に尋ねずなりにけり。

※前非（ぜんぴ）：過去に犯した過ち。先非。

〇しかるにある日武家の遣いとおぼしき者が一挺の乗り物を釣らしたるが、紫苑の宿所へ来て云う様、

「拙者は当郡湯本の領主、寒風夜叉丸の母君、和久糸御前の使いなり。夜叉丸並びに和久糸殿の仰せにて候。此の所に置かれたる流人女竹世は武芸、勇力、世に類無き者の由、近頃その聞こえあり。ここをもて、その竹世を領分に招き寄せ、女武者に為せばやと思われ候。かかればまず客分にて、よろしく扶持いたすべし。しばらく彼の女中を貸したまわるべき旨を申せとの事に候。すなわち和久糸御前の消息（手紙）を持参して候えば、御披見の上、速やかに求めに応じたまえかし。御迎えの乗り物を用意して候」と、いと慇懃に述べしかば、紫苑はその消息を開き見るに、口上の趣と違う事も無かりしかば竹世にかくと告げ知らせるに、竹世はこれを聞きながら、

「その寒風と云う人は元これいかなる者にや」と問うを紫苑は聞きながら、

「然ればとよ、寒風氏は当国の歴々なり。およそ氷原郡に三ケ所の砦あり。牡鹿・蝙蝠・湯本これなり。湯本の領主寒風郡司主は世を去りたまいて、その嫡男の夜叉丸殿が家督を受け継ぎたれども、年なお八九才なるをもて、後室和久糸御前が後ろ見して政治したまうとぞ。是当郡の歴々なるに、御身は今招きに応じて彼処へ赴きたまわれれば、遠からずして立身あるべし。真に目出度き事にこそ」と云えば竹世は一議に及ばず、

「しからんにはその意に任せて、今より彼処へ赴くべし。私は為す業も無く、ここにて御身の養いを受け月日を送らんより、なかなかに本意に叶えり。彼処へ行って勤めるとも客分の事なれば、様子悪しくば帰らんのみ」と云うに紫苑は喜んで、

「私も御身を放ちやる事、願わしからず思えども、出世の門出なれば止めるに由無し。さぁさぁ用意したまえ」とて急がし立ててぞ遣わしける。

〇されば竹世は乗り物にうち乗って、迎えの人々に伴われ、その日寒風の屋敷に至りしかば、後室の和久糸御前は嫡子夜叉丸と諸共に四五人の腰元を従えて竹世に対面あり、辺近く招き寄せ、

「此は初めて会いはべり。そなたの武勇は古にも類い稀なる事の由を伝え聞きつつ、慕わしさに

使いをもって云わせしに、早速に受け引いて面を合わせられし事、本意に叶って喜びはべり。見られる如く夜叉丸は僅かに九才になりはべるに、この地も海上の守りとして武芸を磨くを公への奉公にしはべるなる。しかるを今よりそなたの如き勇婦を扶持しはべりては数多の士卒を得たらんより心強く思いはべり。まずまず休息したまえ」と懇ろに慰めて、奥と表の間なる離れ座敷を部屋としたまわり、三度の食事と着る物まで乏しからず物せられ、世に隔て無く使われけり。

されば竹世は何時となく出頭して勤める程に、此の浦の者どもが領主へ願う事あれば、必ず竹世の取りなしを頼みしに、その筋邪ならぬ者を竹世は必ず取りなして、願いを叶え得させしかば、浦人らは皆喜んで、竹世に物を贈りしかども竹世は一つもこれを受けず、只潔白を旨とせしかば、浦人いよいよ喜びけり。▼

かくて今年も既に暮れなんとする師走も半ばになりにければ、ある夜和久糸御前は年忘れの酒宴を催して、

「竹世にも酒を飲ませよ」とて、辺近く招かれけり。かくて竹世はその席に至りて見るに、幼君夜叉丸も母君の辺にあり、若き男もうち混じり、酒盛り最中なりければ、ついで悪しと思いつつ走りいでんとしてけるを和久糸御前は呼び止めて、

「竹世はなどて、来るより早く何処へ逃げて行くぞや」と云われて竹世は元の座に直り、

「私は元これ流人にして御家来にははべらぬに、殿様も御座します、若き男もはべるなるこの御座敷を汚さんはいとはばかりにこそはべれ」と云うを後室は笑いつつ、

「さても竹世の物堅さよ。そなたは萬に隔て無き心腹の者なりと頼もしく思わずば、いかでかここへ招くべき。その若者は便之介旦風と呼ばれたる、すなわち譜代の郎党なり。いささかも遠慮はあらず、今宵は酒を過ぐしよ」と懇ろに説き示し、盃を賜りけり。

かくて又、和久糸御前は一人の腰元に筑紫琴を調べさせ、

「今宵は竹世をもてなしの為、夜叉丸に笛を吹かすべし。丸は年なお九つなれども、武芸は更なり。遊芸にも器用なる者になん。さぁさぁ」と促したまえば、夜叉丸はすなわち横笛を吹きすさみ、琴の調べに合わせけり。されば竹世はかくまでに和久糸御前の懇ろなるもてなしを深く感じて思わず興に入りしかば、巡り来る盃を引き受けて飲む程に、和久糸御前は喜ばしげに、

「竹世は酒を嗜むと聞しが、思いしよりは見事なり。そもそもそこにはべる便之介は武芸を好んで心様のまめやかなる者ぞかし。今年は二十八才になりぬ。見られる如く男振りも色白にして人柄良し。春にもなれば仲立ちして、竹世そなたの男にしつべし。必ず嫌いたまうな」と云われて竹世は顔うち赤めて、

「此は思い掛けも無き。私は流人の事なるに、いかにして身内人と夫婦になる由はべらんや。その儀は許させたまえかし」と否むを聞かず、

「然ればとよ。今とて事を定めるにあらず。年明けて又、ゆるやかに婚縁を取り結ぶべし。今宵が縁の始めなれば、便之介、その盃を干して、竹世に差しね」と云われる主の指図に便之介は竹世に向かって名乗りをしつつ、大盃を差しにけり。

さる程に盃もしばしば巡り竹世は八九分に酔いにければ、過ちあらん事を恐れて喜びを述べ、暇を乞うて己が部屋にぞ退きける。この日は師走の望月（満月）が▼隈も無く冴え渡り、昼の如く明かりけるに、竹世は余興なお尽きず心の内に思う様、

「・・・・・私は武芸勇力をもて寒風殿に招かれしに、只仮初めの務めにのみ幾ばくの日を送って、久しく武芸を怠りぬ。この月明かりに棒を使い、腹をこなして眠らん」とて、部屋の庭へ立ちいでつつ、しばらく棒を使う程に、八つの鐘が響くにぞ、いざさらば眠らんとて内へ入らんとする程に、たちまち奥庭の方に当たって、ひどく女の叫ぶ声して、「盗人入りぬ」と呼ばれるを竹世は早く聞きつけて、

「さては曲者ごさんなれ。我が身を養い置かれるはかかる時の用にこそ立てんとの為なれば、いでや盗人を絡め捕り、日頃の恵みを返さんず」と一人語つつ、持ったる棒を取り直し、脇に挟さんで奥庭指して馳せ行って、ここか彼処かと尋ねる程に、彼の便之介旦風が奥の方より走り出て、「竹世殿、遅かりし。我が盗人を追い出せしに、一人は東の方へ逃げたり。木立ちの隈を訪ねたまえ。我らは出口を取り固み、西の方を守るべし」と云うに竹世は心得て、庭の木の間をあちこちと尋ね巡る折しもあれ、空は群雲たち覆い、たちまち月をかき消して、射干玉の闇になりしかば、竹世は石につまづいて、思わずだうと伏し転べば、袖垣の陰よりして数多の下部が走り出て、

「すわ、盗人はここにあり。さぁ絡めよ」と罵って、手に手に竹世を取り押さえ、早ひしひしと縛めけり。その時竹世は声を振り立て、

「人々、粗忽の振る舞いすな。私はこれ竹世なり。などてかく理不尽なる振る舞いするや」と罵るを皆々聞かずあざ笑い、

「この盗人の猛々しさよ。小夜更けて、この所へ忍び入りしは盗みをせん為ならずして、何に来るべき。さぁ引き立てて注進せん。早く立ちね」と小突き回して、縁側近く引き据えたり。

　しばらくして和久糸御前は女どもに手足（手下）を取らして、端近く立ち出て、竹世をうち見て気色を荒立て、

「汝には日頃、情けをかけて、我懇ろに召使いしに、今更何の不足があって肝太くも盗みをしたるや。始め此上無き罪を犯して島流しになりたれども、尚も悪心失せずして恩を仇にて返すやあらん。見下げ果てたる曲者かな」と息巻き猛く罵れば、竹世は騒がずうち見上げ、

「私いかでか、後ろ暗き業をしはべるべき。先にこの所に当たりて、「盗人入りぬ」と呼び張りし、その声定かに聞こえしかば、その盗人を絡めん為に▼走り参りはべりしをこの人々が理不尽に私を盗人なりとして縛しめてこそはべるなれ」と云えば和久糸はあざ笑い、

「論より証拠と云う事あり。者ども竹世を引き持て行って、此奴の部屋を家探しせよ」と云うに皆々心得て、竹世を部屋に引き立て行って、所持の葛籠を改め見るに、上の方には衣服あり。下には銀の皿、銚子など、宵に酒盛りに用いられたる品々が数多ありければ、竹世はひたと驚き呆れて、

「さては我が身は和久糸御前の奸計（悪だくみ）に落とされたり。そも何故に彼の後室は私をかくは謀りならん。いと情け無き心かな」と恨み憤れども、今更にその甲斐とては無かりけり。

〇かくて和久糸御前はその明けの朝に家の子（家臣）、下部を差し添えて、竹世を牡鹿嶋の砦へ送り遣わし、彼女の盗みせしと云う事の趣を書き認めて、彼の銀の皿、銚子なんどを贈物としつつ、秋田城之介景盛の役人に引き渡しけり。

〇さる程に牡鹿嶋の眼代脇本治部之進は寒風夜叉丸の書状を見て、まず雑兵らに竹世を受け取らせ、送りの人を帰し遣わし、竹世には厳しく首枷を掛けて、その罪状を責め問うに、予て寒風より

数多の頼みを受けしかば、更に竹世に口を開かせず、
「この女めは人を殺してこの地へ流されたる者なれば、さる盗みもすべき筈なり。者ども此奴を鞭打って、白状させよ」と息巻きけり。その時竹世は治部之進に無実の罪の事の由を云い説かんと思いたりしに、治部之進はいささかも竹世に口を開かせず、只速やかにうち懲らして「白状せよ」と息巻きたる。
　事の心を竹世は察して、この人は公ならずして訴人を引くと見えたり。かかれば今言葉を尽くして無実の由を述べるとも、取り上げる事はあるべからず。まずしかじかと白状して、呵責を逃れてその後に、罪無き由を云い開く事の便宜もありもやせん。もしこのままに打ち殺されれば、恥の上の恥なりと思案をしつつ、声を振り立て、
「しばらく鞭を止めたまえ。事の由を申し上げん。私がふとした出来心をもて、彼の品々を盗みし事は相違あらず」と云いしかば、治部之進は「さもこそ」とて死囚牢と名付けたる重き咎人を繋ぎ置く、岩屋の牢にぞ遣わしける。およそこの牢屋に入る罪人の命助かる事が無ければ、死囚牢と云うなるべし。
　さる程に二藍の紫苑は竹世が無実の罪により死囚牢に繋がれたりと伝え聞き、ひどく驚き、急ぎ牡鹿嶋へ走り来て、竹世を救う事の手立てを父鵜太夫と談合するに、鵜太夫はしばしば嘆息して、
「我れ密かに世の風聞を探り聞きしに、寒風の後室の和久糸は毛門神野衾に縁ある蝙蝠の領主横島慊杖照行と予て密通の聞こえあり。さるにより密かに照行と示し合わせて、うまく竹世をおびき寄せ、遂に無実の罪に落として、野衾の為に先度の遺恨を返さんと謀りしなり。これにより横島、寒風の両家は当所の眼代諸役人と浅からぬ所縁がありしかば、竹世は盗人に定められて、岩屋の牢屋に繋がれたり。我は此の浦の地役人にて流人の支配をするのみなれば、此の度の事などに言葉を添える事は得ならず。しかれども副眼代の直木正作主は行い正しき人なれば、横島、寒風の頼み事をちっとも受けず、しばしば竹世の是非を論じて、盗みせしと云う事は無実ならんと云うにより、脇本氏も一概に竹世の▼罪を定めかね、評議まちまちなりと聞きぬ。御事は竹世の恩を受けしに、今その恩を返さずば義を結んで姉妹と唱える甲斐も無きに似たり。よって思うに、御事は早く牢屋預かり河東法六の宿所へ赴き、法六の内儀（妻）を頼って、竹世が牢屋の苦痛を逃れる便宜を頼まばと夫に告げて、ともかくもせられんか。さはれ彼の人々にしかじかと頼まずば、夫も又、詮無き事なり。さぁさぁ用意せよかし」と言葉せわしく囁き示すを紫苑は聞いて一議に及ばず、形の如くに用意して、密かに河東法六の宿所へ赴き、その妻の素焼野に対面して、竹世を救うべき事の手立てを懇ろに頼み聞こえて、事しかじかと告げにければ、素焼野は聞いて頭を傾け、
「この度の竹世の罪の趣はその虚実定かならずと夫も予て云いし事あり。法六は今朝出仕して、未だ宿にははべらねど帰宅に程もあらざるべし。しばらく待ちたまえ」とて茶をすすめ菓子をすすめて、いとまめやかにもてなす折から、法六が帰り来にければ、素焼野はしかじかと紫苑の頼みの事の由をつぶさに夫に告げしかば、法六は聞いて「しからんには我も紫苑に対面せん」とて、客座敷に赴きつつ、さて云う様、
「御頼みの一條は只今素焼野が詳かに告げたれば、承知して候えども。予てより横島と寒風の両家は重立ちたる輩と内縁あって親しく候に、それがしが又誤って、その品々を受けたれば、今更に詮方無し。但し、副眼代の直木正作主ばかりは只彼の頼みを受けずして、竹世が無実の罪たる由を折々眼代脇本氏へ云われると聞こえたり。かかれば早く伝手を求め、直木氏を頼みたまえば、竹

世を救う事もあるべし。それがしとても鵜太夫殿と同藩の好あるに、その娘御の御頼みを否み申すにあらねども、只今告げたる訳あれば我が力には及び難し。さりながら密かに竹世に会わんとならば、折を見計らい案内すべし。この儀を心得たまいね」と心の底を囁き示して、しかとは請け引かざりけるを紫苑はなおも頼みしかば法六もさのみはとて、ようやくに請け引きけり。

かくて紫苑は伝手を求めて、副眼代の直木正作に竹世の事を密かに頼んで、云々と語らいしに、正作はその事を受けず、▼

「しかれども竹世の事は元より無実の罪なれば、力を尽くして救うべし。心長く待たれよ」と云う返事が定かに聞こえしかば、紫苑は深く喜んで、すなわち更に伝手を求めて、眼代脇本治部之進とその下役らを頼みけり。

〇さる程にその次の日に紫苑は河東法六の手引きによって、岩谷の牢屋に入る事を得たりしかば、紫苑はようやく本意を遂げて、密かに竹世に対面しつつ、およそ此の度の一條は野衾に縁ある横島慊杖照行と寒風の後室和久糸御前が示し合わして、竹世を罪に落せし事、又、和久糸御前は照行と密通してありし事、且つ当所眼代脇本治部之進は彼の両家と年頃親しきによって、竹世を害せんと謀れども、副眼代の直木正作のみ従わず、この故に未だ罪の軽重を定めかねられる事、総ては紫苑が心を尽くして、河東法六その余の人々をこしらえつつ、いささか便宜を得たりし由をつまびらかに囁き告げて、かかれば命つつが無く、汚名を清める時もあるべし。気長く時節を待ちたまえと懇ろに慰めて、いとまめやかにいたわりければ、竹世は紫苑の浅からぬ志に感涙を拭いあえず、思いし事を語らって、牢屋の苦患（地獄の苦しみ）を慰めけり。

されば竹世は昨日まで折を得ば、牢屋を壊ちて逃れいでんと思いしかども、只今紫苑がしかじかと便宜の由を告げしを聞いて、末頼もしき心地して、逃れ去らんとせし事はこれより思い止まりけり。

〇されば紫苑は法六の情けによって、その次の日も牢屋に到り、竹世に会って酒食をすすめ、その後又、両三日を経て、食べ物を贈り遣わし、通路三度に及びしを横島慊杖が聞きつけて密かに治部之進に告げ知らせしかば、治部之進は驚き怒り、夜昼と無く牢屋の辺に雑兵を付け置いて、およそその役ならざる者の通路を止めたりければ、紫苑は竹世に会う事得ならず、僅かに法六を頼みつつ、折々酒食を贈るのみ。しかれども法六の計らいにて竹世の首枷を除き許し、大方ならず哀れみければ、竹世は牢屋の苦患も無かりし、人の情けを喜びけり。▼

さる程に直木正作は折々上役の治部之進を諫めて、

「竹世の罪は無実なり。粗忽の計らいしたまえば後悔あるべし」と云いしかば、治部之進も心一つに取り計らう事得ならず。或る日また正作と対座して竹世の事を談ずるに、正作は便宜を得て、横島、寒風両家の奸曲（悪巧み）、又彼の毛門神野衾の事、世の風聞の趣をしかじかと囁き示し、かかれば竹世は彼の人々の恨みによって無実の咎に落とされたるに疑い無し。しかれども横島、寒風は当郡の歴々なれば、その悪巧みを詮索せんも、又、これ事の難儀あるべし。所詮、竹世は夜を冒して主人の奥庭へ入りたれば、盗人に似たる罪をもて、再び遠き島などへ流さるべき者か、此の儀をもって鎌倉へ聞こえ上げ、主君の下知に従えば、後難絶えて無かるべし」と云うに治部之進は始め

て悟って、口惜しくも彼の人々に欺かれて竹世を殺さんと謀りし事こそ、返す返すも落ち度なれば、さらば事の由を鎌倉へ聞こえ上げんとて、俄かに呈書を書きしたためて飛脚を鎌倉へ遣わしけり。

かくて一月余りを経て、その飛脚は鎌倉より帰り来つ。主君景盛への下知状が到来してければ、治部之進、正作らが慎んで披見するに、流人竹世の罪の事を執権北条殿へ聞こえ上げ、且つ、御下知を伝えるものなり。六十日の日柄果てれば、竹世は鞭の数二十鞭打ちで、更に外ヶ浜※へ流し遣わすべしとありしかば、重ねて異議に及ぶべくもあらず、治部之進はその意を得て、かたの如くに計らいけり。

※外ヶ浜（そとがはま）：青森県の日本海側の地の古称。特に、津軽半島北部三厩（みんまや）村の海岸をいう。

〇さる程に六十日の日柄も果てしかば、牡鹿嶋の眼代治部之進は竹世を牢屋より引き出させ、背を二十鞭打たせて、更に又、首枷を掛け、むさ七、堀八と云う二人の雑兵を差し添えて、外ヶ浜へ流し遣わすに、竹世は法六の情けにより、獄卒らも心して背を軽く打ちしかば鞭の苦痛は無かりけり。

〇この日二藍の紫苑は下部僕介に風呂敷包みを背負わせて出て、町外れの茶店に居り、竹世が過ぎるを待ち付けて、忙わしく走り出て、名残りを惜しみ涙を注いで、しばらく道の辺なる仕出し酒屋に憩わせて、別れの盃をすすめんと云いけるをむさ七、堀八が請け引かねば、紫苑はその両人に各々五両の銀子を贈って、しばしの暇を乞うと云えども、むさ七、堀八はその金を投げ返し、「我らいかでか、彼ばかりの賄賂を貪って、ここらに足を止めんや。さぁさぁ行きね」と催促す。紫苑も今は詮方無く、懐より金二十両と僕介に背負わせたる旅衣装の一包みを竹世に贈って、さて云う様、
「姉御前、願うは身を愛して赦免の時を待ちたまえ。直木氏の計らいにて、命は助かりたまえども、さればとて油断はならず、長き旅寝に用心して、人にな謀られたまいそ」と云えば竹世は頷いて、「その儀は気遣いしたまうな。私は既に分別あり。只心得難きは御身がひどく面やつれて、髪の内に傷もやある。鉢巻きをしたまいしはいかなる故ぞ」と尋ねれば紫苑は答えて
「然ればとよ、去ぬる日彼の毛門神野衾が三十余人の手下を引き連れ、私の宿所へ押し寄せ来て、私を惨く打擲し、奴婢どもを追い散らし、稽古所をも酒店をも奪い取りはべりにき。この故に私は辛くも牡鹿嶋の親鵜太夫の宿所へ帰り、うち臥してはべりしかば、御身に食事を贈る事も得ならず▼、鵜大夫が折々に法六殿まで食物を贈り遣わしはべりにき。この傷未だ癒えねども、御身に会わんと思うばかりに、病を押して来るなり」と告げるに竹世は驚いて、無念やるかた無けれども、むさ七、堀八に追っ立てられて、思いし事をかにかくに云いも尽くさぬ別れ路の袂をそこに分かちけり。

〇かくて竹世は宰領の雑兵に追い立てられて、三里余り行く程に、そのむさ七、堀八はしばしば後ろを見返って、「彼の人々はなどてや遅き。モウ見えそうなものじゃが」と囁くを漏れ聞きたる竹世は聞かぬ面持ちして、又、二三十町行く程に、向かいに一筋の小川が横たわり、土塊橋を架けたるあり。この川端の柳の元に六尺豊かの大男が両人長き刀を横たえ、此方を向いて佇みたるが、

むさ七らを見て目配せしつつ、後になり先に立って、その橋を渡る時、竹世は心に推すれども、尚も油断の体にもてなし、堀八を見返って、「ここは何処」と尋ねれば、堀八は声を苛立てて、
「知らずやここは女川の川上、雲水橋と云う橋なり。さぁさぁ渡れ」と云いも果たさず、持つたる棒を▼取り直し、矢庭に竹世の足を払って川へ落とさんとしてけるを竹世は早く足を飛ばして、堀八を橋より下へたちまちはたと蹴落とせば、むさ七あなやと驚き怒って、刀を抜いて後ろより竹世を斬らんと進む所を竹世はひらりと身をかわし、つと付け入って、むさ七が持つたる刀を奪い取り、おつとおめいてはたと斬る、刃の冴えも勇婦の勢い、怒りと共に首枷はさっくと裂けて飛び散ったり。

既にしてむさ七は肩先四五寸の深手を負って、橋のたもとへ倒れしかば、彼の同類の大男らはこの有様に肝を潰して、「叶わじ」とや思いけん。一足出して逃げんとするを竹世はすかさず追っかけ追い詰め、その一人を斬り伏せて、残る一人の首打ち落とし、橋より下へ飛び降りて、蹴落としたる堀八が半死半生なるを引き寄せて、首かき落として立ち上がるに、冬の川の事にしあれば、水浅くして膝に及ばず、かくて又、深手を負って倒れ伏したるむさ七を引き起こし、
「汝ら何者に頼まれて、私を害せんと謀りしぞ。ありつるままに白状せば、命を助け得さすべし。いかにぞや」と責め問えば、むさ七は苦しげに、
「この事は予ねてより横島殿と野衾に頼まれて、数多の金を贈られたる。欲に迷ってその儀を受け引き、加勢の為に遣わしたる野衾の武芸の弟子と示し合わして、御身を殺さんと謀りしなり。許したまえ」と詫びしかば、竹世は聞いてあざ笑い、
「その儀ならば許し難し」と云うより早く突き倒し、むさ七を刺し殺し、又、彼の一人の大男の未だ死なでありけるを引き起こして責め問うに苦痛に耐えず陳ずる様、
「我々は野衾の腹心の者にて、それがしは畫目の木兎蔵と呼ばれる者なり。又一人は皿田鳶九郎と云う者なり。むさ七、堀八がもし仕損じる事もやあらんと思慮せられたる野衾の指図に従い、我々両人予ねてより、むさ七、堀八と示し合わせ、此の所に待ち合わして、御身を殺さんと謀りし事、今更後悔つかまつりぬ。許したまえ」と詫びにけり。

傾城水滸伝　第六編ノ四　曲亭馬琴著　歌川国安画

その時竹世は木兎蔵の白状を聞きながら、
「しからば汝に尋ねる事あり。野衾は今何処に居る。さぁ云わずや」と襟骨が砕けるばかりに取り縛れば、木兎蔵はいよいよ苦痛に得耐えず、細れる声を振るわして、
「その儀もつぶさに云うべきに、しばらく拳を緩めたまえ。我が師匠の野衾は横島殿と諸共に、寒風殿の屋敷に至って、梅見がてらに鴛鴦楼にて和久糸御前と酒盛り遊んで、我々が訪れをここにて待たんと云われたり。かかれば今なお、彼の所に居るに相違は候わじ」と云えば竹世は頷いて、
「この上は汝に用は無し。いでいで暇を取らせんず」と云うより早く首打ち落とし、その四人の者どもの腰刀を皆一つに寄せて、その内から切れ味のしかるべきを選び取り、先に紫苑が贈りたる風呂敷の旅衣装に着替えて裳裾をつま挟み、一人つらつら思う様、

「・・・・・この者どもを討ち果たせしとて、我が恨みが晴れるにあらず。いでや彼処へ赴いて、皆殺しにて腹を醫ん。元より彼の寒風親子は我が主君にはあらざるに、今更誰にはばからんや」と一人語ちつつ足に任せて、湯本を指して急ぐ程に、道にして日は暮れたり。されば雲水橋の辺には常に行き来が稀なれば、竹世の▼その体たらくを見咎める者無かりけり。

〇さる程に竹世はその夜亥中の頃に、寒風の屋敷の表門の戸の方に走り着いてうかがうに、門番の下部は熟睡をしけん、鼾の声がかすかなり。その時竹世は腹の内に謀り事を思い起こして、右に刃を抜きそばめ、左の手をもて門の戸をキリキリと押し鳴らせば、門番たちまち驚き覚めて、
「何奴なれば、戸に当たってこぢ開けんとしつるぞや。思うに必ず盗人ならん。絡め捕らんは易けれども、いと寒ければ許し置く。さぁ立ち去れ」と罵りけり。竹世は密かに笑みを含んで、又、門の戸を押し鳴らせば門番の下部はこらえかね、
「此の盗人めが不敵さよ。去ねと云うに未だ行かずば、絡め捕って手柄にせん。そこな退きそ」と息巻いて、六尺棒と細引きの麻縄手早く脇挟み、門のくぐり戸押し開けて、いでるを竹世は飛びかかり、襟髪掴んでぐっと押し伏せ、
「汝は我を見知りておらん。私は今尋ねる事あり。横島照行と野衾は未だ帰らず奥にや居るか。ありのままに告げ知らせれば、命を助け得さすべし。声を立てれば掴み殺さん。いかにぞや」と責め問われて下部は魂身に添わず、既にこの荒女を竹世なりと知りけるに、手に刃さえ持ちたれば歯の根も合わず声を振るわし、
「竹世の刀自、許したまえ。尋ねたまう横島様と毛門神は今日の昼より鴛鴦楼に御座るげな。長尻なれば未だ帰らず。此の儀ちっとも相違無し。あら苦しや」とうちうめけば、竹世は「さこそ」と頷いて、細引きの縄を奪い取り、此の門番を縛めて、手拭い食せる猿ぐつわ、門の格子に繋ぎ留め、にっこと笑みつつ見返って、
「汝を殺すは易けれども、数にも足らぬ者どもを無益の殺生何にせん。しばらくそこに居よかし」と云い捨てて、つと内に入る。案内知ったる事なれば、難無く奥に忍び入るに、台子の間に腰元の女どもが集い居たるが、一人はたちまち欠伸して、
「あのお客たちは夜の更けるに、何時まで帰らず居たまう事ぞ」と云えば一人が
「然ればとよ。今日昼よりの酒盛りじゃに、あの様にも飲まれるものか。とても今宵は寝られはせまい」と託言（恨み）がましく※呟きけり。竹世はこれを立ち聞きして、
「さては横島めも野衾めも▼未だ帰らず、鴛鴦楼にまさしく居るに極まれり。我が今、台子の間を過ぎって、彼の高楼に赴けば女どもが驚き騒いで、必ず声を立てるならん。さる時は罪も無き彼女らなりとて許し難し。これも無益の殺生なり。この所より東の方の廊下を巡れば、鴛鴦楼の梯子の元に到るに近かり。日頃案内は良く知りぬ。さは」とてやがて抜き足しつつ、東の廊下に巡り出て、彼の高楼に忍び近づき梯子を半ばよじ上り、事の様子をうかがいける。

※託言がまし（かごとがまし）：恨みがましいさまだ。愚痴でもこぼしているようだ。

〇さる程に蝙蝠の領主横島慊杖照行は予て和久糸御前と示し合わせ、竹世を無実の罪に落として、野衾の為に日頃の恨みを返さんと巧みしは元野衾は照行が鎌倉より伴い来たれる勇力の女なるに、脆くも竹世に討ち倒されしを口惜しく思うのみならず、野衾もまた照行の手を借りて、遺恨を晴ら

さんと思いしかば、数多の金を費やして、照行と和久糸御前に贈りし事があればなり。これをもて照行は野袞を我が屋敷に隠し置き、竹世が牢屋に繋がれし時、牡鹿嶋の眼代、その余の役人にも多く贈り物して、速やかに竹世の罪を定められん事を求めしに、副眼代の直木正作に支えられて、その事を果たせず、あまつさえ鎌倉より執権の下知として、竹世が再び外ヶ浜へ流されると聞こえしかば、たちまち望みを失って、なお又、竹世を送りの雑兵むさ七、堀八に十両の金を贈り、道にて竹世を殺させんと謀るものながら、竹世は聞こえし勇婦なれば、仕損じる事もあらんかとて、野袞の腹心の教え子の鳶九郎と木兎蔵両人を遣わして、人の行き来の常に稀なる雲水橋の辺にて、竹世を殺さんと謀りしなり。これにより照行はこの日野袞を伴って寒風の屋敷に至り、鴛鴦楼に団欒して、彼の者どもが仕終せて帰るを遅しと待ちたりけり。

そもそもこの高楼を鴛鴦楼と名付けしは先の領主寒風郡司が物好きにて、唐紙、杉戸、壁、襖に至るまで、多く鴛鴦を描かせたれば鴛鴦楼と呼びなしたり。しかるに後室和久糸は横島照行と密通してより、この高楼にて忍び逢いけり。事の心は鴛鴦の番離れぬ楽しみを長く取らんとの為なるべし。

この時如月の中頃にて、庭の八重梅が色々なる今を盛りと咲き乱れしかば、和久糸御前はこの日梅見の酒宴を催して、照行並びに野袞をもてなしけるに、その日も暮れて春の月、東園に差し上り、昼の如く明かりしかば、照行は酒の酔いを醒まさんとて、高楼の欄干に肘をもたして、むさ七、堀八、木兎蔵、鳶九郎らの噂をしつつ、

「いかに彼の者どもは思いのままに仕終せたらんか。よしや竹世が猛くとも久しく牢屋に繋がれて、且つ二十鞭打たれたりと云えば大方弱り果てたるならん。さるを四人が総がかりにして討てば、仕終せざる事あらじ」と云えば野袞も微笑んで、

「真に殿の宣う如く、彼の鳶九郎、木兎蔵は武芸に優れて力も強し。行き来六七里の道ならんに、帰るに程はあるべからず」と云うに和久糸も頷いて、

「よしや夜はなお更けるとも、待ち明かしたまえかし。今に吉相あるべきに」と云うを竹世は聞きながら、怒りに耐えず。つかつかと梯子を上り、声振り立てて、

「ねぢけ人共、覚悟して刃を受けよ」と罵れば、三人ひとしくきっと見て、此はそもいかにとばかりに驚き騒いで度を失い、皆逃げ道を求めたる、周章大方ならざりけり。

その時竹世は引き下げたる刃をきらりと振り上げ、走りかかるを支える野袞、方辺の燭台かい取って、打たんとするを物ともせざりして、竹世は早く身をかわし、左手に丁と燭台を握りとどめて返す刀に野袞の肩先をばらりずんと斬り付ければ、あっと叫んで倒れたり。その隙に照行は脇差しを引き抜いて、面も振らず斬ってかかるを竹世は得たりと▼迎え進んで、おめき叫んで戦ったり。さる程に和久糸は逃げんとするにも道が無ければ、竹世の後ろに立ち巡り、足を取らんとする所を竹世はすかさずはたと蹴る。蹴られてウンとうめきも果てず、身をひるがえして倒れるを見返りもせぬ竹世の早技。踏み込み踏み込み戦う程に、照行が数ケ所の深手を負って、よろめく所を丁と斬る。刃の冴えに照行は二つになって倒れたる。

響きに和久糸は息吹き返し、逃げんとするを追い討ちに浴びせかけたる勇婦の手の内、和久糸も肩先より七九のゆ☆まで斬り下げられて、倒れ伏したる毛門神に転びかかれば、野袞は忽然として息吹き返し、方辺に落ちたる照行の脇差しをかい取って、再び竹世と戦えども初大刀の痛手にただむき衰え、竹世の刃を受け損じ、とんぼ返れる野袞の頭は前にはたと落ち、躯も共に倒れけり。

さる程に竹世は既に思いのままに三人の仇を殺し尽くして、なお照行と和久糸にとどめを刺して、にっこうち笑み血潮をもって、方辺の壁に、「人を殺す者はこれ虎を討ちし竹世なり」と二行に書き付けて、血刀ひ下げて静々と梯子を下りて下屋に至れば、女どもは逃げ失せて、しかじかと告げたりけん。若党、下部が群たち来て、或るいは刃をきらめかし、六尺棒をうち振って、討ち取らんとておっ取り巻くを竹世は騒がずきっと見て、人無き境に入る如く、斬りなびけ討ち散らして何処までもと追っかけたり。

この物音に夜叉丸は臥所より起きて来て、「乳母よ。乳母よ」と呼びながら、早次の間へ立ちいでたる。向かいにうかがう便之介は半弓を引き固め、竹世を目掛けて切り放す弦音と共に竹世は身を縮まして、早くその矢を避けしかば、狙い違って向かいより、既にいで来る夜叉丸が胸先より背までたちまち野深に射抜かれて、「あなや」と一声叫びもあえず、仰け反り倒れて息絶えけり。

便之介旦風はこの体たらくに驚き騒いで、弓投げ捨てて腰刀を引き抜かんとする程しもあらせず、竹世はひらりと走りかかって、便之介の鳩尾の辺りを「ぐさ」と刺し貫けば、叫び苦しむ旦風は手足をもがいて死んでけり。

この時若党、下部どもは皆事如く逃げ失せて、敵対う者も無かりしかば、竹世はやがて血刀を拭い納めて、夜叉丸の亡骸を見て、

「嗟嘆（嘆き）に耐えず哀れむべし。幼き人さえ非命に終わりを取りし事はその親の隠毒の子にさえ報うものならん。実に積悪の家には余殃（因果応報）あり。恐るべし恐るべし」と一人語ちつつ悠々と表門より出て行くを縛しめられたる門番はこの時までも格子の下にうづくまり居て、おめおめと、しばし竹世を見送りけり。▼

されば又、寒風の後室和久糸は大方ならぬ淫婦にて、便之介旦風と予ねてより密通して男妾にしたりしに、又、照行にも密通して世の誹りをはばからず。この故に衣装、髪の飾りは更なり、遊興に奢りを尽くして、領分の貢ぎを重くし、海陸の民に課役を掛けて虐げる事多かりしを竹世は更なり、紫苑すら初めはかくとも知らずして、彼女の為に謀られけり。云わんや又、横島照行は善人を疎み、悪人に親しみ、女子小人をのみ愛して、非法の行いを旨とせしにより、これかれ共に竹世の為にあたら命を失って、両家断絶に及びしは先祖の御霊も見放したる隠毒の報いなるべしと云わぬ者なん無かりける。

さる程に竹世は既に寒風の屋敷を走り出る時、まだ子の時に過ぎざりしかば、足に任せて走る程に思わず道に迷って、行けども行けども里に出ず、夜は早七つの頃にやと思うに、行く手は只茫々たる枯れ尾花のみ多かるをかき分けかき分け行き悩む、向かいに響く弦音と共に飛び来る一筋の征矢に竹世は驚いて、しばし辺りに眼を配るに、幸いにして矢は逸て、我が身につつが無かりけり。

かかる所に左右の草むら陰より荒男二人が走り来て、竹槍をひらめかし、茅の内に佇み居たる竹世を目掛けて突かんとするを竹世はすかさず槍の穂先を握り止め、引き寄せかい掴み、だうと投げれば残る一人も驚き恐れて、逃げんとするを逃がしもやらず、又、引き掴み戻りをうたせて、三間余り投げ伏せて、怒りに耐えぬ声高やかに、

「命知らずの山立ち（山賊）どもら、女と思い侮ってか。天罰思い知らせんず」と息巻き猛く罵れば、手に弓矢を携えたる一人の狩り人が向かいより忙わしく走り来て、

「女中、無札を許したまえ。我々は山賊ならず此の辺りの狩り人なるが、御身を熊と思い違えて、

矢を射かけ、槍を突かんとしつつ、事がここに及べるなり。粗忽を云い解く由もあらねど、互いにちとの怪我も無きはなお幸いにはべるかし」と詫びつつも、有明の月明かりに透かし見て、「あら思い掛けざりき。御身は竹世の刀自ならずや」と云うに竹世も眼を定めて、その狩り人をよく見るに、是すなわち別人ならず、十字堤にて義を結びたる花圃の青芝なりければ、「此は此はいかに」とばかりに喜ぶこと大方ならず。投げられたりける狩り人らも、この女は世に隠れ無き竹世なりと初めて知って身を起こし、跪いて粗忽の罪を詫びにけり。

その時青芝は竹世に▼向かって、

「先に御身の意見に従い、我々夫婦は旅人を止めて害する悪行を為さず、夜な夜な此の辺りを狩り荒らす獲物の猪鹿を肴にして、今なお酒を売りはべり。或るいは又、獣の肉を歳饅頭にこしらえて、遠近人にひさぐ（売る）のみ。御身は又、いかなる故にてここらを徘徊したまいし。見れば着る物に血潮が染みたり。定めて故ある事にこそ」と云うに竹世は頷いて、

「私の上は一朝に説き尽くすべくもはべらず。止む事を得ず人を殺めて、身を隠さんと欲するのみ」と告げれば青芝は辺りを見返り、

「しからんには夜の明けぬ間に宿所へ伴いはべるべし。いざたまえ」と先に立って、十字堤へ誘いつつ、夫損次郎にしかじかと竹世の事を囁き示せば、損次郎は忙わしく出迎えて対面し、竹世を奥座敷に忍ばせて、酒をすすめ朝飯を炊きなどしつ、大方ならずいたわりけり。

この時竹世は牡鹿嶋にて紫苑の恵みを受けし事、彼女の為に毛門神野衾をうち倒せし事、湯本の領主寒風の後室に招かれて、遂にその謀り事に落とし入れられ、久しく牢屋に繋がれしに、味方の雑兵ら四人を害して、取って返して湯本に赴き、横島照行、和久糸御前、野衾、便之介なんど、恨みある悪者どもを一人も漏らさず殺し尽くして、逃れ来る事の由をつまびらかに物語れば、損次郎、青芝らは一度は驚き一度は喜んで、「しからんに、まずはしばらくここに忍びて御座せよ」とて、彼の両人の狩り人は更なり、小者らにも皆心を得さして、いと頼もしく匿いけり。

さる程に寒風、横島両家の郎党らは主が討たれしに驚き騒いで、その明けの朝に牡鹿嶋の眼代に由を告げて、その点検※を乞いしかば、脇本治部之進は驚いて、時を移さず誰彼を寒風の屋敷へ遣わして、死骸を改めさせなどする程に、又、彼の雲水橋の辺の里人らはその夕暮れにむさ七、堀八、木兎蔵、鳶九郎らの横死の亡骸を見出して、これも次の日、牡鹿嶋の砦へ訴えいでしかば、治部之進は速やかに組子を八方へ手分けして、竹世の行方を尋ねさせしに、既に早時刻遅れて及ぶべくもあらざれば、皆いたずらに帰りけり。さればとて、事私の計らいに為すべきにあらざれば、やがて鎌倉へ飛脚を遣わし、主人景盛にしかじかと事の由を告げたりけり。これにより景盛は又、執権家に聞こえ上げ、竹世を追捕の由を乞いしに、執権義時の沙汰として陸奥は更なり、およそ五畿七道※へ竹世の姿絵をもって触れ知らせ、この姿絵に似たる女があれば速やかに絡め捕って参らすべしとぞ、下知せられける。

※七道（しちどう）：東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道。

〇されば竹世は思わずも、先に青芝に巡り会いし夜より十字堤の彼らの宿所に匿われ、忍んで一月余りを過ごす程に、ある日青芝はその夫損次郎と諸共に密かに竹世に談合する様、

「かく云えば何とやらん。祟りを恐れ義に背き、御身をいぶせく（不快に）思うに似たれど、いかにせ

ん既に御身の姿絵をもて詮索厳重の聞こえあり。我々は諸共に命を失うとも惜しむにあらねど、さればとて手を束ねて、ここにて捕らわれるを待たん事は▼思いの計り無き業にあらずや。我が宿は一つ屋にて隣に疎くはべれども、牡鹿嶋へは程遠からず。この故に御身をすすめ遣わして世を忍ばせんと思う究竟の所あり。その儀に従いたまわんや」と云うを竹世は聞きながら、

「事既にかくの如く追捕厳重ならんには速やかに他郷へ行くべし。我が身は既に此上無き罪を犯したれば、いかになるとも元より覚悟の事なれば驚くべきにあらねども、御身夫婦を巻き添えせば後悔そこに絶ち難し。行くべき先は何処ぞや。説き諭したまいね」と思い入って答えるにぞ、青芝らは喜んで、

「我々が今御身をすすめて遣わさんと云いつる所は河内に名だたる金剛山なり。彼の山の砦には花殻の尼妙達、青嵐の青柳らが五六百人の兵を集めつつ立て籠もり、国司領主に従わず、おのがままに振る舞って年月を送るとぞ。先にも御身に告げたる如く、我々夫婦は妙達と一面の交わりあり。去ぬる頃彼の山より消息（手紙）を寄せられて我々夫婦を招かれたれども、この所も又、捨て難ければ、まだ彼処へは行かざるなり。御身今より金剛山に赴いて、妙達、青柳と諸共にその山に籠もりたまえば、錦の上に花を折り添え、黄金に玉を寄せるが如く、砦はいよいよ光を増して世に恐れる事はあるべからず。さぁさぁ思いたちたまえ」とて、いとまめやかにすすめれば、竹世はひたすら喜び感じて、

「私も予て妙達と青柳の名は聞き知って慕わしく思いはべりしに、御身夫婦の手引きによって彼処の群れに入らん事、本意に叶って喜びはべり。さぁ引き付け（紹介）の消息を書きしたためてたまえかし」と云うに損次郎はうち案じて、

「その書状を書く事はいと容易き業なれども、ここに一つの難儀あり。この所より河内までは遙々の道なるに、今国々には隈も無く、をさをさ御身の姿絵を巷々に掛けさせて、尋ねられると聞こえしに、そのままに旅をしたまえば、たちまち人に見咎められて絡め捕られる事もやあらん。この義はいかに」と囁くを青芝「実にも」と頭を傾け、

「私の意見に付きたまえば、さる災いもあるまじけれど、おそらくは竹世の刀自、得用いたまうまじ」と云うを竹世は聞きながら、

「時の用には鼻をも削ぐ※、例えもあるに、この期に及んで何事をか否むべき。良き手立てのあるならば示したまえ」と乞い問えば、青芝答えて

「然ればとよ。御身の髻を半ば切り、地者（堅気の女）、修行者に姿をやつして、その山へ赴きたまえば、見咎める者はあるべからず」と云えば損次郎は眉をひそめて、「その謀り事は良しと云えども、髻を切りたるのみにては未だ人目を欺くに足らず。幸いに良き物あり。我々夫婦が悪行をなお旨としたる頃、ある日一人の旅虚無僧を殺害して路用の金を奪いし事あり。かくてその虚無僧の天蓋、尺八、戒刀、袈裟、衣類まで、今も納めて古葛籠の底にあり。なかんずく戒刀は類い▼稀なる名刀にやあらん。夜更けて折々吼える事あり。さればこの品々にて、竹世の刀自を旅虚無僧にいでたたし（扮装）て、天蓋にて面を隠すものならば、誰が見咎める者のあるべき。この儀に従いたまえかし」と云うに喜ぶ竹世は更なり、青芝もまた頷いて、

「我が夫よ、いみじく謀りたまいね。竹世の刀自の教訓にて、先つ頃より我々夫婦は悪行を止めたりしに、その旧悪を懺悔の為、殺して捕りし旅虚無僧の天蓋をもて、此の刀自が身につつが無く河内まで容易く至りたまわれれば、悪を懲らし善をすすめし、その陰徳の報いと云わまし。いと目出

度し」とまめだって、妙達へ引き付けの消息（手紙）を書きしたため、彼の袈裟、天蓋、戒刀を葛籠の底より取り出して、餞の金十両と共に竹世に贈りにければ、竹世は夫婦の情けを感じて髻を切り頭陀（修行僧）※となって、彼の虚無僧の装束して、その明けの朝に門出すれば、主人夫婦はこれを送って、

「我々は故主の為に大望ある者なるに、為す事も無くこの所にあたら月日を送らんより、折を得ば諸共に金剛山へ赴くべし。花殻の尼にこれらの由を伝えたまえ」と懇ろに頼み聞こえて見送りけり。

※削ぐ（そぐ）：①先端や突き出た部分を切り落とす。 ②先をとがらせる。 ③髪の先を切る。

※頭陀（ずだ）：①食を乞(こ)いながら野宿などして巡り歩いて修行する。②「頭陀袋」の略。

〇さる程に竹世は遠く越路を経て、河内へ赴かんと思いしかば、旅寝を重ねて陸奥を過ぎりつつ、ある日陸奥の国鹿沼の郡の小野岳の麓まで来にけり。されば此の辺りの鳥居峠をうち越えれば、越後の村松に至るべく、又、八十里越を過ぎれば同国の吉平に至るべしと予て聞けども道遠く、早夕暮れになるものから、駅路（宿場）※も無く人里も有らずと見れば、山陰に当たれる一棟の庵ありけり。

※駅路（うまやじ）：宿場のある街道。えきろ。②宿場

今宵の宿を乞えばやと思いつつ折戸口より進み入るに、この庵の窓の内に年四十余りの山伏と十八九の女が此方を眺めて居たりしが、竹世が進み入るを見て、女はたちまち隠れたり。その時竹世は門口に佇んで、「行き暮らしたる修行者に今宵の宿を許したまえ」と高やかに呼び張れば、その山伏の弟子にやあらん、二十歳余りの山伏が徳利を引き下げつつ、他所より帰り来て、竹世が佇みしをつらつら見て、「ここは旅籠屋ならざれば、御宿は叶い難し」と云うを竹世は聞きながら、

「旅籠屋にあらざる事はさ思いはべりしかども、折節辺りに里も無し。まげて一夜を明かさせたまえ」と云うを又、つくづくと見返って、

「よしやお宿を致すとも▼参らせる糧も無し。さばれかくまで宣えば、事の由を主人に告げて、そのまにまにすべきなり。しばらくそこに待ちたまえ」と云い捨てて、早内に入りしが、とばかりにして出て来ず、内には人の囁く声のみが折々かすかに聞こえけり。既に日陰は入り果てて黄昏時になるままに、竹世は一人思う様、

「・・・・・先にちらりと見出したる主人と覚しき山伏は面魂が一癖あるべき者なるに、若き女が此の所に一つに居るも相応しからず、まいて今の青入道が我の背負いたる旅包みに眼を付けて、幾度と無く見返りたるも、いといぶかし。もし我を引き止めて暮れるを待って、密かに殺して路銀を盗らんと欲する事の巧みもそこに無からずやは。先に青芝夫婦の者が贈りたるこの戒刀は世に類い無き名剣ならんと云われしかども、事に合わねばまだ切れ味を試みず。彼奴ら果たして山賊ならば、今宵我れがこの戒刀を試して刃を祀るべし。アァしかなり」と腹の内に思い定めつ、戒刀を抜き放ち、つらつら見て、やをら鞘に納める折から、彼の若き山伏が立ち出て、

「宣う由を師の坊に告げ、取りなしたれども御宿は叶い候わず。これより半道ばかりなる鬼面山の辺には良き旅籠屋が候なり。さばれ早日が暮れたれば迷わせたまう事もあるべし。道標して参らせよと云い付けられて候えば、案内を致すべし。いざたまえ」と云い掛けて、先に立ちつつ伴うに、

竹世は今更否むに由無く、喜びを述べ後に付いて、五六町行く程に、日は暮れ果てて道暗き、山懐を過ぎる時、彼の山伏はかき消す如く、たちまち見えずなりしかば、「彼はいかに」といぶかって、見返る後ろにきらめく段平。討たんと進む曲者の刃に竹世はちっともたゆまず、さ知ったりと戒刀を引き抜いて、戦う程に取って返せし弟子の悪僧、声をも掛けず、後ろより斬ってかかりし刃に恐れぬ竹世は前後に敵を受けて、斬り払い斬りなびき、秘術を尽くして戦ったり。折から出づる山の端の月明かりに今一人の曲者をよく見れば、すなわち主人の山伏なり。竹世は予てかくあるべしと思い設けし事なれば、ちっとも疑義せず左右に当たって、踏み込み踏み込む大刀風に悪僧らは早斬りたてられて、両人深手を負いしかば、叶わじとや思いけん。刃を引いて逃げ走るを尚もすかさず追っ掛ける。竹世は声を振り立てて、「始めには似ぬ盗賊ども、返せ戻せ」と呼び掛けたり。

されば二人の悪僧は庵の内へ逃げ籠もり、戸を引き閉んとする程に、竹世は早く追い詰めて、彼の年若き悪僧をばらりずんと斬り倒せば、主人の山伏いよいよ慌てて、遂に支える暇も無く、竹世に首を打ち落とされて躯もはたと倒れけり。

その時竹世は声高やかに、

「この菴中の女、さぁいでよ。汝も同じ賊の眷属。積悪※の報い遂に逃れず、夫と共に命を失う時の至れるを知らざるや。さぁさぁいでよ」と呼ば張れば、女は慌てふためいて奥の方より走り出て、「聖、私を許したまえ」と▼云わせも果てず待ち設けたる竹世は刃を振り上げて、斬らんと進めば、あなやとばかり驚き慌てて、走り退く女は声を震わして、

「聖、しばらく私を許して、まず云う事を聞きたまえ。私はこの悪僧の妻子にははべらずかし。ここより二三里北の方の柔弱村の者にて、親は彌惣六と呼ばれたる百姓にてはべりにき。しかるに悪僧は能莫院と名乗りつつ、弟子の山伏栃面坊を従えて国々を修行すとて、ある時我が親の家に宿りを求めたり。折から母は物の怪により病み臥してはべりしかば、我が父この能莫院を悪者なりとは思いも掛けず、加持祈祷を頼みたるに、母の病が癒えにければ二親共に喜んで能莫院を信仰の余り、久しく家に留める程に、何時しか私に懸念（執着）して、折々口説きよると云えども私はいかで従うべき。目の当たりに恥かしめてもなお懲りずまに、もつれかかれば詮方無さに、しかじかと由を二親に告げしかば、父はひどく腹立てて能莫院を責め罵り、追い出さんとしてけるに、能莫院はこれを恨み、栃面坊と示し合わせ、ある夜私の二親は更なり、家の内の者どもをこと如く斬り殺して、金銀家財を奪い取り、割無く私を引き立てて此の所へ逃れ来て、遂に私を妻と呼び、栃面坊と諸共に山賊を業として、既に三歳の月日を送れり。さればこの身の味気無さ、親の敵に取り込められて、身を汚されし不仕合せ。只速やかに自害して死なばやと思いしかども、待てしばし長らえて油断をうかがい恨みを返して、その時にこそ死なんずと思い返して、仇に従う心の苦しさは例えるものも無けれども、敵は二人の山賊にて我が身は女の身一つなれば、事の便宜を得る由も無く、今日まで過ごしはべりしに、図らず御身の手を借りて、二つの仇を討ち果たしつつ、恨みを返せし喜びを察したまえ」と云いかけて、よよとばかりに泣き沈む。竹世はこれを聞きながら思わずも嗟嘆（嘆き）※に耐えず、

「その云うところ真ならば、いと哀れむべき者なりかし。そちが名は何と云うやらん。他所に身近き親類のありもやする」と尋ねれば女は答えて、

「私の名は菅薦と呼ばれはべり。故郷の隣村に一人の叔母がはべるなる。願うはそこへ送り届けて、事の由を尋ねたまえば、御疑いはたちまち晴れん。御哀れみを頼むのみ」と云うに竹世は頷いて、

「しからばそちが秘蔵の品を皆携えて庵をいでよ。この草庵を此のまま置けば再び賊の住処となならん。今この庵を焼き払わんに、さぁさぁせよ」と急がしたてて、あちこちに火を放ち、遂に庵を焼き尽くし、菅薦を伴って夜すがら道を走りつつ、叔母の宿所へ赴きけり。

※積悪（せきあく）：長い間積み重ねた悪事。　※嗟嘆（さたん）：①なげくこと。嗟咨(さし)。②感心してほめること。嗟賞(さしよう)。

〇かくて竹世は菅薦を叔母の宿所へ送り届けて、事の由を告げにければ、▼叔母は喜びかつ悲しんで、過ぎ越し方をかき口説き、菅薦と手を取り交わして、声を惜しまずうち泣きしをしばらくして涙を止め、竹世に向かって姪の為に喜びを述べ恩を謝して、さて云う様、

「能莫院が住みなしたる彼の山の草庵は元はこの菅薦の親の別荘にてはべりしを彼奴が奪い取りしなり。さるを柔弱の村人も又、ここらの里人も知らざるにあらねども、この地の人は義に疎く、且つ惰弱にして、人の為に力を尽くす事を欲せず。且つ領主の御館へ道遠ければ、訴えの費えを厭いて、能莫院の悪行を知りつつも知らぬ面持ちして年頃を過ぐせしなり。しかるに御身の情けによって仇を殺し恨みを返して、菅薦をつつが無く再び故郷へ帰されしは真に此上無き大恩なり。しばらく逗留したまえとて、いとまめやかにもてなしけり。されども竹世は世を忍ぶ身のここも陸奥の内なれば、久しく杖を留めん事を欲せず、僅かに一夜さ宿れるのみ。その明けの朝に別れを告げて越後の方へ急ぎけり。

作者曰く、これよりして竹世の顛末、並びに春雨の大箱が再び災いに会える事なんど、物語りいよいよ多かり。今年も板元の求めも出し難く、第六編より八編まで十二冊著したれば、六編、七編、八編と続いて出板致すべし。なおとこしなへにもて遊び、益々御評判をたまえかし。

＜翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三　禁転載　底本／早稲田大学図書館所蔵資料＞